
魔王と呼ばれていた少女（？）

GARU

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王と呼ばれていた少女（？）

【Zコード】

N4074F

【作者名】

GARU

【あらすじ】

事の発端は何だったのだろうか。アイツとあつた事？関わった事？それとも巻き込まれたことか？何はともあれ毎度の「」とく巻き込まれた騒動。しかも今回はこれまで以上に洒落にならなくて…。神様、本気でもういい加減にシテクダサイヨ（涙

第0話・プロローグ

(「みんなさーいでしたっ！…）

今更の様な氣もしないでもない自己紹介の後、事態の顛末を訊ねて返ってきた言葉はソレだつた。

なんと書つか、行き成り過ぎて訳が分からぬ。

それはまあなんとなく予測はつづがどちらかと言えば田の前のこの少女も被害者には変わりない筈なのだ。

まつたく無関係だった自分を巻き込んでしまつたが故にと考えればまあ多少は理解できるか。

もつともこいつはともかく俺としてはまあこいつのことは一言で済ませれるが。

……変だなんでだか泣けてくるよ。

込みあがつてぐる感情を何とか押し隠し、気にするなど意思を伝える。

(でも……やっぱり私のせいだから。失敗しちゃつたせいだから…)

効果は全然。

とうとう涙まで浮かべだす始末。

(ああつ もう いいからソレはもつといいかい。何がビリなつてるか聞かせてくれな。なつなつ)

わハコレ以上はと慌てて話題転換。

と慌てか本命の話題に強引にでも引き戻す。

(ぐすりじめんなさい私のせいだこんな事にしてしゃって……でもこれぐらいしか方法が思いつかなくて…)

(だーーかーーらつ泣かないつ責めないつ怒らないから。とにかく俺とお前に何があつたか答えてプリーズ!…!…)

それでもなお際限なく落ち込んでいく少女に力押しでもつて言葉をぶつける。

場合によつては逆効果だが、それ以前にこのままほつとこたら悪化しかしないんだから仕方ない。

(グスリうん、ちゃんとお話ししないと…私はともかくジージはこれからずっととの事だし)

何とか持ち直してくれたことでホッとしたのもつかの間、なにやら嫌な言葉を聞いた気がした。

(あ…あの…フイーさん…イマナンテイマシタカ?)

(あつえつと、だから…ずっとそのままだつて)

律儀にもう一度返してくれた言葉はやっぱり聞き違えではなくて。

(あの…それひいてのまま一生指一本動かせないままこの事なのでしょうか…)

あまりの宣告に田の前の全てが真っ黒になる。

指一本所が五感すら正常でない現状が一生もの。

どんな地獄だよ。

それはもう本氣の叫び。

(あつうううと体の方は明日にでも多分何とかなる…と思つ。大丈夫、ちゃんと元の身体と同じように動かせますうんぜんぜん問題なんて無いから)

絶望直前の心はそんな慌てたような言葉に救われた。

(ホントだな、ウソじゃないよな、聞き違いでもないよな)

(うううん本当にウソじゃないよー。ちゃんと主導権は全部あげたから。全部ジージの身体だよ)

(はあ～よかつた～つたく脅かすなよな)

心底ホッとしたと全身の強張りを抜く。

(で、結局のところ何が一生モノなんだ?)

そして気になる部分を軽く訪ねかける。

結局の所俺自身の問題と言えば全身が全く動かせない事ぐらいで、ソレさい解決の保障を貰えてればなんとでも出来そうな自信はある。

これでも散々騒動ヒトラブルには巻き込まれてきたんだ。

耐性は人一倍ビショジヤないだり。

ソレはソレで哀しいが。

(えつと……その……その身体が……です)

(……は?)

そして返ってきた答えはまた訳の分からぬモノ。

(そりゃ身体が一生ものだってのは改めて言われんでもわかるが……んな事わざわざ言わなくとも当たり前の事だろ?が)

呆れ半分に返す最中、ふとこいつが特殊な種族であることを思い出す。

(そういうやあそうか、フリーたちの種族だとそういうでもないのか?)

(えつと……うん、そう。だから私は全然問題ないというか、むしろ早過ぎたから丁度良かつたという感じなんだけど)

どこか恥ずかしげに頬を赤らめつつ。

(でもジージはもうじやないから……元の身体は私のせいで無くなつ

ちやつたし、魂は何とか大丈夫だつたけど……身体、私のしかなかつたし……このままだと死んじやうか幽靈になつちやうかしそうだつたから……

(さよないとマト)

なにやら延々と話し続けよひとしてくるフイーの言葉を強引ことめる。

俺の経験と言つが本能と言つが、ともかく根本的な部分で聞き逃してはマズイと警笛が鳴つてこるので。

(ん? ジージビ'したの?)

(一 ハ確認したい)

(……ハシ)

(俺の身体がどうなつたつて?)

(えつと……やの…………) めんなさい。ちょっと火力を間違えちゃつて(……)

(……)

(…………) めんなさい。えつとやの……私が灰にしちゃいまし
た)

物凄い勢いで頭を下げる。

(……でだ、今俺は死くなつてゐる。ちゃんと身体は在つて、生きていらんんだよな)

(あつうん、それは大丈夫。ちゃんと在るから生きてるから)

(……じゃあ今の俺の身体は?)

(うふっ私のをあげたの)

…………ダカラチヨシトマテ。

第1話・始まりは「」から（前書き）

主人公にとつては日常（？）

第1話・始まりは「」

「…ひたく最近はよけいに落ち着いてきてたとゆつたのによつ

後方から聞こえてくる怒声を引連れ、幅の狭い裏道をひた走る。

見失われない程度の速度。

右へ左へと、包囲陣前を刃で巻き込む様にして。

それなりの人数に囲まれているのに気配と視線で始めから判つていた事だった。

なにせどいつもこいつもたいした技量も持たない、勢いと感情任せなチンピラばかり。

撒けないなんて事は無い。

蹴散らしていくのもたいした手間でない。

「待てや」「

「逃げんじゃねーぞ腰抜けー」

不愉快極まりない罵声を飛ばされる度に、衝動のままに暴れれば少しばかりは気が晴れなくも無いかなーとは確かに思つ。

後の面倒や厄介」とも一人残らず全滅させちまえばいい田へくる手も無くなるだろつとは思つ…とこりか思いたい。

常識的に考えれば確かにそうなのだが、そうでない自分の不運ぶりに少し遠い目になりかける。

そういうことで終わればどれだけ楽か。

10数人程度のチンピラなどどれだけ過剰評価しても雑魚以外になりえない。

たとえバツクにじこじの大人物が居ようが問題にならない程度にはどうにかできる自信はあるのだ。

こざとなれば逃げることだって造作もない。

街1つ消すのに比べたら比べるのも馴鹿らしい程にお手軽な手段。

何のじがらみもない根無し草な俺だけ……なりばな。

軽く意識を抱きかかえているソレに向ける。

抱きかかえられ、首筋に顔を埋めたまま今尚スヤスヤと絶贊睡眠中なこの子へと。

(まつしかしこの子が眠りこけてくれてるのだけでも多少は楽か
つ)

裏道が何かから先回りでもしてきたであろう正面建物の一階から飛び掛ってきた馬鹿を勢いそのままに後方に放り投げて右脇に見えた小道へと入り込む。

スピードは殺さず。

勢いは散らし。

眠り子をけつして起さぬ様に。

「いのつチョコマカと鬱陶しつ」

「ソレはこいつの台詞だつ」

「起きちまつだらつがつ！」

…と心の中でだけの大絶叫。

「まつたぐ、戦争が在るつが無かるつが変わらねえなあ

長く続いた戦争もようやく終わりを迎えてから2年の月日が流れ
た。

戦争の爪痕や混乱は消える様子はないが、それでも人と人との間に笑顔が少し多く見え始めだした頃合。

そんな活気と力強さを眺めながら、俺自身もそろそろ落ち着いて
きたかな～

…つと油断してたがらみつコレだ。

しかもこんなタイミングで。

流石俺だと大笑いしたくなる。

もちろんヤケクソ気味なヤツでだ。

… 分虚しくなるだけだから本当にやりはしないが。

右へ左への激しい動きにくわえ、普通田の覚めそうな金属同士の奏でる剣戟の音まであってしても今だ起きる配ゼロな少女をせりにしつかりと抱きかかる。

「たく迷子の面倒だけで十分手一杯だったのに… よ」

それが問題を大事へと発展させたくない理由。

逃げの一手を早々に除外しなければならなかつた理由もある。

怒氣交じりの眩きと共に、またも上空から降つてきた敵を… 急静止＆バックステップで回避。

着地状態のソイツを鬱憤扱しの勢い込めて一刀の元に斬り捨てる。

苛立ちをぶつける相手はまだまだ出てくる。

だがそいつら自体が苛立ちの元凶だというから斬つても斬つても収まらない。

さりに相手が余りに雑魚過ぎて、手応えが無む過ごして鬱憤晴らしにもなりもしない。

「全然これっぽっちも望んじゃねーの!」。次から次へとあーーーっ

ああもうちりん判つてゐたつ。

原因は俺だつたことぐらう。

世間一般からの視線も、評価も。

狙われてる十一分に自覚はある。

でも下手な火種から積極的に逃げてた。

にもかかわらず…

合ひも変わらず騒動は起つてゐるし。

騒乱には巻き込まれる。

運命とか神様つてのはこの世で一番嫌いな言葉だよ。

ああそつさ全部悪いのは俺だよ。

狙われているのは俺で。

この子はただそれに巻き込まれただけ。

ああそつだ。

いつもそつだ。

俺は運が無い。

あつても悪運。

まともなソレじゃねえ。

それはもうホント極端なぐらい。

気まぐれに人助けでもしようものなら何故か助けた方が悪者だつたり。

野宿の最中に襲われ、危うく食い殺されそうになりながらも返り討ちにした野獣が実はそこの國では聖獸と崇められている生き物だつたりだとか。

…実は氣付かなかつただけで、その森事態入ることすら禁忌とされているなんて後から言われても。柵も囲いも無いのに、んなこと判るかー！！

さらには子供と遊んでただけで人攫い扱いされるは。

行きがかり上泥棒を撃退し、盜品を取り戻してみれば逆に泥棒だと衛兵に追いかけられるは。

挙げ句の果てには、何時も何時も因縁つけてくる小娘が実は勇者様だ救世主様だと騒がれている英雄様の一人だつたりしての訳で…

つたくなんだよ魔王ジーニアスつて。

しかもソレを面白がる連中が周囲にはウジャウジャと…

あーもうつなんか思い出してだけで素で腹が立ってきた。

「死ね————」

「あー——つうつとうしごつ」

懲りることなく正面から突っ込んでくる新たな雑魚を一人一人と。
不意打ちでも狙っていたか後ろからの三人目と左右からの四人
目五人目。

切り伏せ、貫き、氷漬けにして一気に走り抜ける。

「無駄だ無駄だとわかんねーのかよつバカがつ」

聞く者のいない愚痴を吐いては捨てる。

本当に…

今も昔も…

争いが在ろうが無からうが…

こういった手合いの馬鹿は尽きることが無い。

路地を抜け、少し空けた広場のような場所へと飛び出す。

「つたくなんなんだよお前らはよ」

あまりに見慣れた状況。

「ホンシト毎度毎度…お約束過ぎる展開だあなー」

なんとなしに予感はしていたが本當になるとは感心してしまつ。

「クスクスクス。オーポッハモハマドヒツ事ですよ、魔剣士殿」

そんなセリフと共に出てきた一人の男。

見た目印象は似非インテリ。

両脇には辺境辺りで熊か何かと取つ組み合いでもしてた方が似合いそうな筋肉ダルマを従えてのび登場である。

「うわあ～

思わずして言葉が漏れる。

「なんと言つか、ハハまで来ると一種の喜劇か何かでしかお田にとかれないチヨイスだ。

「貴方も不運な方ですね。本来なら何の関係も無い筈のお人がこんな事に巻き込まれることとなつてしまつて。心より同情させていただきますよ」

そんな俺の胸の内など知りもしないであろう三下は、何がそんなに可笑しいのか笑いをかみ殺すような…見下した様な笑みでもつて言葉を紡ぎ始める。

「しかし不運と言つのはなにも貴方だけではありません。私共もう。貴方の様なお強い方が現れなければ、事はそれほど荒立てる必

要も無く、ましてや貴重な部下たちの命をいつも多くのいたずらに失う事もありませんでしたのでしょうか

「ひ」

不運と言いつつもただ言葉だけな感じ、部下を駒としか見ていないのが見え見えの物言い。

「そう、そうです私共も決して事を荒立てたかった訳ではないのです。貴方が素直にその子供を渡して頂ければ貴方だけではなく口までに消えていった私共の部下の命全てが無駄に消えることはありますんでしたでしょうに。そう考えると被害者はむしろ私共かもせんね。貴方が無闇矢鱈と首を突っ込んできさえしなければ失うものなど、誰も、何一つとしてなかつたのでしょうから」

しかも言つて早々に突拍子も無い屁理屈で自分を被害者扱いか。

首を突っ込むも何も問答無用で襲つてきたのはあんたらなんだけどな。

とりあえずこの馬鹿の戯言がどこまでも続くか、今の所は聞いてみたくなつた。

「無論私とて血も涙も無い鬼ではありません。ましてやそれ以上に、ただ降り掛かる火の粉を払うだけしか能の無い愚者でもありません。どうです、私の元にその子と共に来る気はありませんか？もちろん報酬は破格で用意させていただき

ますよ。まつ最も失った部下たちの埋め合わせをしていただいた後に…とはなりますけどね。私としても心苦しいですが、多くの部下たちを納得させる措置として捉えていただきたい」

部下思いと思われたいのか、しかしそのイヤらしい笑みを差し引くと説得力は薄無。

「瞬ワザとか？などとも思いかけた程の胡散臭さ。

「じつです？決して悪い話ではないと思いますが。貴方ほどの腕、口元で消してしまるのはあまりに惜しい、貴方も少しだして血殺志願者と言う訳ではないのでしょうか？私の元でその腕を振るつていただけるのでしたらすぐにも私の右腕となるだけのものは持つていると見ますがどうでしょうか？異存などありますか？」

もはや選択肢などあつはしない、とでも言いたげな口調。

というかまんまそんな感じの口振り。

しかし、兎にも角にも實に良べ疊る口だ。

よく舌が疲れないものだと感心すら出来る。

内容はともかく……だが。

しかしまあ「いつヤツが困るから」の言葉などだらつかアレは。

「弱い犬ほど良く舐える……か……」

なんとも微妙な言葉だ。

対象となつてこるのがこんなんだと思つと特に。

第2話・真に巻き込まれし者は（前書き）

チンピラ のファーバータイム

第2話・眞に巻き込まれし者は

十分に喋つて満足したのかその男は嫌らしげ笑みをそのままに、ただその田が俺に答えを促してきてやがる様子だ。

「どうやら先程の俺の言葉は聞こえていなかつたらしい。

別に聞かせたかった訳でもないからどうでも良いが。

この手の連中の中には異常なまでに血肉への侮蔑に敏感なものも居るから。

もつとも、田の前の馬鹿に関しては…

自分の口上に酔い、悦に漫つてゐるだけの可能性もあるだらうが。

と云つて、何気に一番ありえそうで笑える。

何と言つてか道化以上に道化染みてゐる。

「それではお返事を聞かせていただきましょつか?」

「さなりもう待ち切れなくなつたのか。

むしろ即答していくとでも期待してたからか。

一向に何も言わない俺に対して、言葉でもつて直接返事を求めてきやがった。

最も「こいつの中じや、承諾以外の答えは思い浮かびもしない
んだろ」などな。

即答で拒絶してやつても良かつたが、『ハセ』「ちよつと氣にな
る」とがあった。

「一々…聞いても良いか？」

「ええ、私に答えられるものでしたら」

反応が返ってきた事に余裕でも感じたが、大袈裟な物言いと仕草
でもつての見下し。

何故かこいつの中では好感触な問いやしぃ。

「あんた等の本来の狙いは『この子』なのか？俺じやなくて『

何故かは判らないが聞いていた言葉の端々に…と言つたが明らかに
全ての話しお渦中に居たのは俺じやなくてフイーの方だ。

「ええそうですが…まさか貴方そんな事すらも知らずに…ククク
ツアハハそれはそれは、本当に運が無い。同情しますよ、ええ本当
に、心からね」

本当に嫌みつたらしく晒す。

「ハセまで『露骨』だとワザとやつているんじやないかと本気で考える
や。

と『詫うかむしろ大能』と言つた方がしっくりくるかもしね。

(羨ましさなど欠片も感じられない才能だらつけどな)

それでも胸の内の引っかかりは取れた。

なんてことは無い。

つまりはあれだ、ナニヨウただ単につまらんこぞリゾリュウを込まれただけ。

当人らには悪いがこの程度、俺にしてみればぬるすぎてトラブルとも言えねえ。

「さて、貴方の質問にも答えてあげました訳ですし。そろそろ貴方のお返事を聞かせていただきましょうか」

「ヤーヤ」と笑う小物。

「まあ聞くまでもない事かもしませんが、こいつに此事は言葉ではつきり示しておいた方が後々トラブルも少ないのでしょうしね」

自分の頭の中で展開している自己中な妄想が絶対とでも思つていいのか、なかなかにお出度い頭の中だ。

「ああそつだな」

だからその言葉だけには同意してやる。

確かにさつきつぱりいやらなことの手の輩には通じないだろ？
し。

「答えはノーだ。わかつたらさつと散りやがれ、目障り……ん？」

広域型の魔術で一気に散らしきとした所で感じた微妙な違和感。発動することなく消失した魔術式を確認するまでもなくその正体に思考が行き着く。

（これはまた…隨分と羽振りの良い）

少なくとも、普通街の「ロツキ連中」が所持していられるものじゃない。

「ククク…どうしましたか？もしかして魔術でも使おうとしまして？クスクスクス無駄ですよ無駄、少なくともこの周囲一帯では一切の魔術行使は不可能ですから。クスクスクス残念でしたね～」

見下すような、嘲る様な晒い。

本当に、ここまで人をムカつかせるのは正真正銘才能だろう。

「しかし貴方と違つて私は運が良い。本来でしたらその娘子の暴走を抑止するために用意しておいた、いわば保険でしかなかつた物が、まさかこの様な結果をもたらしてくれる事となるとは」

暴走？

抑止？

やはりなんと言つか、訳有りか。

もはや確認するまでもない。

しかしづつちやけた話事情なんて今はまあそれほど重要と言つわけでもない。

確かに悪人っぽい連中が見た目通りに悪人で無いこともある。

状況次第では悪人こそが正しいときも確かにある。

だから事態の把握は俺にとつては何よりも優先させなければならぬはずのこと。

過去の…山の様な経験の数々が俺にそんな考えを刻ませるくらいには大量に在るのだ。

それはもう本当に悲しくなる程には。

とは言え、口口まで見下されていて笑つて「ハイソウデスカ」などと言えるほどにお氣楽な人間にはできていない。

なによりこの手のチンピラがまともな善人などとは到底思えない。

誇りや信念のある悪とも思えない。

言葉通りなただのチンピラ風情だらう。

それに…

あのムカツク一やケ顔をひきつけさせるのは、ちょっとだけ胸が

スッとしゃうだし。

理由としてはまあそこそこである程度は大丈夫だろう。

「さて、寛大な私ですから今一度聞いてあげましょ。どうです私の部下になりませんか?」

だから答えてやる。

今度は軽いおまけもつけてでなつ。

「嫌だ、断る、考えられねーよ」

誰が聞いたとしても判る明確な嘲りの言葉。

見下す視線に嘲笑の晒い。

向けられたそれらが予想外だったのか一瞬ポカンとした間抜け面を晒してくれた馬鹿は次の瞬間には顔中を真っ赤にさせて吼え凄んで来る。

しかしそこに威圧感は無い。

ただメツキが剥がれただけで、こつけいですらあるピエロだ。

そんな道化の三文芝居を前にし、広げた両手に軽い集中を込める。

両の手に現れたるはそれぞれに別波形の魔力。

本来なら結界によつて瞬時に霧散させられるのだろう。

が…現実にはそうはならなかつた。

そつはさせなかつた。

そうできるだけの技術と知識をもつとして。

そして…

その現実に、状況も忘れて目を開いた連中らの目の前で…

その一つを胸の前で思いつきり叩き付け合ひ。

結果。

巻き起こるは乱雑に絡まり巻き起こる魔力の旋風。

ただそれだけのコト。

人体、自然界への干渉所か、派生そのものを感知する事も普通には難しい微細な波紋。

最も、そんな大部分に属しない結果もまたある。

封魔結晶と分類されるソレにとってのソレとか…

じつして枷は碎かれた。

氣付かぬ馬鹿にはこれ見よがしに魔術式を発動させて判らせてや
るつ。

「」の程度の結界に意味などない事を。

「大方その部下とか言う鍊金術師にでも作らせた物だつたんだろうが…ハツ隨分と脆かつたな」

伝わってきた手応えからははつきりと粉微塵となつたそれらの惨状が感じられた。

「」今まで脆弱いと逆に本気さを疑いたくなる様な呆氣なヤ。

「ばつばかなつ…そんな…なぜ…魔力は完全に封じてたはずだぞ」

「今言わなかつたか？あんた等」この辺の封魔結界はとつぶて粉々だつて

「そんな…そんな馬鹿な、ありえない…」

想定外だつたであらう事態に、余裕も嘲りも零れ落ちたか、狼狽を隠せもしてない引きつった本心が表情に滲み出している。

「まつ俺としては」の程度の結界で何も出来なくなる方が、ありえないことなんだがな

でなきやといづれの昔に墓の中だつての。

「んじゅまつ終わらせるか

腕に纏わせていた術式を広域に開放。

「ここまで来て、やつと現状に判断が追いつけたか、慌てて武器を構えだす有象無象。

ついあえず遅過ぎ。

そして終わりの一手を…

……ショーンッ……

一瞬胸を突き抜けていく様な軽い衝撃。

不意の一撃。

感じたのはそれだけ…

そうたつたそれだけの…

本当に呆気ないほど軽い……

……ソレは死神の鎌だった。

第3話・そして終わつのとき（前書き）

油断大敵

第3話・そして終わつのとき

「ぐつ…はつ…」

込み上がつてくる何か。

痛みなどよりも先に悪寒が全身を駆け巡る。

「…クツ…何者だ」

何が起きたかなど考えるよりも先に直感で覚っている。

射撃。

それも長距離からの。

(くそつ氣を緩めすぎてたか)

油断してた自分自身を真剣に叩き倒したくなる。

現状が現状だけにその必要すらないのがまたムカつく。

(2撃田は…無い…か?)

なんとか精神を研ぎ澄ませ、気配を探るが痕跡から見つからない。

遠退きやうになる意識をそれでも懸命に持ち堪える。

相手を補足出来ない以上どう出でてくるかまるで判別出来ない。

油断は最早欠片とてない。

(ビード……ビード……へそつ見つからない)

穩行か?

距離か?

なんにせよ今の一撃は完全にしてやられた。

索敵の精度がどこまで落ちてこるかは判らない。

しかし唯一一つつわづしてこる結論。

相手に出てきてもらわない限り今ままじゃ勝り殺しがオチ。

ソレがないとする、警戒か確信か…か。

気配を補足されている可能性から俺の次手の警戒。

致命傷を確信しての最期の看取り。

(クッビツしようも…出来ない…か…)

じうこせよ既に盤上はチョックメイト。

致命傷であることは間違いない。

治療の術も、全てを引っくり返せる様な反則技もココには無い。

「ハツははつでかした、でかしましたよ。ははつ余裕が一転完全に逆転しましたね」

それでも何かないかと思考を巡らしている所に、状況を、何一つ正確に理解していないであらう馬鹿の…場違いな叫びが耳に響く。

「ククッ…下手に余裕など見せるからこいつなるんですよ。ククッハハハッ私共の仲間が目に見えるだけのソレと思っていたのですか？ククク愚か、本当に素敵なほどのお馬鹿さんだ」

饒舌に上機嫌に見当違いの言葉を吐き続けるチンピラ。

「ククク…どうです？…どうします？今ならまだ間に合つかもしれませんよ？さあ認めなさい私こそがお前の主人だと。そうすれば飼い主の義務としてすぐにでも手当てをしてあげますよ」

馬鹿な小物とは判つていたが、よもやこの至近距離で傷の深さも認識できないとは。

「あつひ

「あつひ

小さく悲鳴。

それは腕の中からずり落ちた少女が尻餅を着いた為。

「ジージ？」

「まづい。

腕に力が入らない。

感覚が本格的に鈍り始めてる。

「んーん…あれ?ジージはどうしたの?」

見上げてくるその少女に無理やり笑ってみせしやる。

「…ぐつ……じつジージ…」

どれだけ言つても直そうとしないその呼び名に苦笑交じりの抗議を。

…少し気が紛れた。

「ジージ…したの?お腹痛いの?」

ギュッと握り締めるように押さえ続けている腹部を心配げな瞳が見ていく。

漆黒の夜の闇が今は幸いか、滲み零れ続けている血には気付かれて無い。

「ジージ…!」

「…どうして今まできたか。

ガクリと崩れ落ちるように膝を突いた俺に慌てたような少女の顔。

「」の子が狙われている理由は今だ判らない。

気にはなるが、それでもそこを突き詰める余裕は欠片もあればしない。

視界がぼやけ始める。

音が遠くなつていく。

流石にもつ…終わりか。

覚悟は必要なかつた。

碌な死に方はしないという事は、あんな日常を過ぐしていればやでも悟つてしまえる。

そして今その時が来たのだと…それだけの事。

それでも誰かを庇つてなんてのは少しヒーローぽくて良かつたか?

直接的な原因は別でも状況は状況だし。

(ただ後を預ける相手が居ないのが限りなく不安ではあるが…)

それでも今のままよりかは何田畠もマシだと思つかひ。

だから今はその一点のみを田畠して。

「…」

叫ぶ。

声無き言葉で。

魔力をこの身の内より一気に汲み上げる。

半ば暴走しかけているその手綱を必死に手繰り寄せる。

田の前の馬鹿どもをただ消し飛ばすだけなら必要ないであら。

だが、んな事に自分の命一つは安過ぎる。

力任せなソレ全てを繋げ合わせ。

ただ望むべきソノ事象へと。

対象は田の前の少女へと意識を向けているその全ての存在。

効果範囲は今の俺の知覚範囲内の全て。

風属性、縁を伝いて伝達の先まで全ての網を巡らす。

洩れは…無いっ！

元よりそういう状況を打破するべく編み上げた術式。

(つまく生き延びりよ)

状況に思考が追いつかないのか、田を大きく見開いたまま見
上げてくる少女に。

唯一一人、この場で生き残れるであろう少女に。

ただ思い願うはひとつだけ。

「じゃあな、フィー」

思いのほかまともに発せられた言葉に僅かばかりの苦笑。

神様ってヤツもたまには粹な事をと。

まつ生涯最後のだからなのかもしれないがな。

出来ればそのままこの子を頼みたいところだが、そう都合の良い相手ではない事は誰よりも俺が知っている。

「ジージ？」

だから残された時間で出来る全てを。

もしかしたら無関係な誰かをも巻き込むかもしない。

敵だけでなく少女の味方までも巻き込む可能性も捨てきれない。

しかし躊躇いはしなかった。

そんな時間も余裕もない。

ただ、少しでもこの少女を覆つ障害を振り払つがために。

そして…

世界は凍りつく。

唯一人の少女を中心として。

唯一人その少女を除いて。

馬鹿も。

筋肉ダルマも。

その他大勢の雑魚どもも。

俺自身をも。

唯一人の例外も無く。

全ては氷像へと転じる。

対象を認識、思考、干渉せし全ての存在を対象とする連鎖術式。

本来なら呪いなどといった干渉系の術式の対抗術としてのソレだが、こういう使い方も出来る。

もつともこんな方法、味方が誰一人としていない状況下でしか使えない不良術式だが。

だが今はソレで十分。

「いつ等の狙いがこの少女なら狙つてこるとこいつの認識が効果対象。

故に漏れは無い。

ただコイツを助けようと認識している自分自身も効果対象とされてしまうが。

まあすぐにも死ぬ身だしな。

だから問題ない。

…多分。

…うん、まあ大丈夫だろう。

そう思い込んでおいつ。

後は知らん。

氷結した世界の中心でそれを全てを覆う薄い赤き光。

ソレが俺の見た最期の光景だった。

第4話・そして田覚めのとき（前書き）

注意：この作品はT-Sではありますがその事で主人公が苦悩するの
は当分先かも…なにせそれ以上に目に付く問題がもう目の前に、
ゴロですからw

第4話・そして田代のひと

「あーつジーニアス遅いよーもっあつそれでそれでねコロコレ、ホロロの特産でねーすりく美味しいのおつーーー！」

もう無邪気にはしゃいで駆け寄ってきた能天氣の頭に思いつきり俺は拳骨を落としていた。

ソレは日常茶飯事までの家出騒動の何時もの終わり方。

「うひうひうひは間違つてない間違つてないのにビヒヒ……」

これ以上無いと言いたくなる程に精密で正確な魔法式を組みながら何故か発動させずに落ち込むソイツに呆れながら歩み寄る。

ソレはまだ俺が俺の魔法式をソイツに教え始めるよりも少し前の話。

「ちょっとアンタッ姉さまに一体何してんのよー！」

問答無用でいきなり飛び蹴りを何とか避け怒鳴り散らしていたのは…

最早数えるのも億劫なくらい毎度毎度のやり取り。

「おっジーニアス久しづだなつびつだチョット一戦、前は負けたが今度こそは俺が…」

「やれやれ何を騒いでいるんですかあなた達は。そんな事よりもジ

「――アス、先程姫様から手紙が届いたと……」

「てめーっローレンっ！邪魔すんじゃねーよ」

暑苦しいバトルジャンキーと冷静沈着を絵に描いたような凸凹口
ンビ。

嫌いではなかつたがこれ以上騒動に巻き込まないでくれといふのが俺の正直な感想だつたか。

あとそんなに氣になつてゐるなり自分でも手紙を出せと一言。

「お帰りなさいませジー――アス様。それで此度はどうぞ」と。

振り回されるだけ振り回されてようやく帰つてこられた所でそう微笑まれる。

何と言つか本当にソレは貴重な程に数少ない当時の癒しだった。

……

……

そんな何気ない会話、やり取りの数々。

賑やかしく騒がしく、平穏とはとても言えない日々だったが……そ
れでも悪くない日常だった。

…世界が戦火の渦の渦中に在った中であつたとしても。

それ故にそんな日常は一時の夢の如く夢ぐ…

「あははっあんなのでも一応は父様だしね~」

困った様な、そんな無理矢理な笑みはどうしようもなくコイツら
しくなくて…

「まつたくいつもいつも面倒ばかり…ジー二アス、ココは私がなん
としますから先に…」

憎まれ口を零しながら立ち止まるかの背を支へ、譲る事の出来ない自分が歎痒くて…

…確かに立った筈のやの田常はその立場へこしと崩れ落ちた。

…夢。

そつ… これはそんな日の夢。

確かにあつた日々。

そつ。

在つた日々。

今でも…

未来でも…

可能性でもない。

確實に在つたと言つ覆せない過去。

そんな日々の欠片が脳裏を駆け抜ける。

そんな夢と自覚できる夢。

そしてその中に居た自分。

夢はいつの間にか主觀的視点から客觀的なソレへと変わっていた。

なんとなしに可笑しく感じられる。

夢とは本来夢と氣付かむだらう。

しかし現に今いつして俺は自身の過去を夢に見ている。

(ああ… そつか、これが…)

ふと思ひ浮かんだ単語。

しかしソレはあつせつと納得の形に納められた答え。

(……走馬灯つてヤツなのかな)

自身に起きたソレに思い至り。

コレが世によく聞くアレだと理解した。

波乱万丈を絵に描いたような自身の人生。

それでも尚コレは初めての体験だな。

(まあ普通に考えれば何度も見る方が可笑しいんだろうけどよ)

そう苦笑氣味の感傷に浸りながら、目の前の思い出に視線を向ける。

なんとなく… いつの間にか視線が気持ち遠くなっている様な気がした。

輪郭も少しほやけ始めているか…？

全体的に白みを帯び始めているか…？

そこまで意識した瞬間。

変化は田に見て判るほどに加速。

(そりか…もう最後か…)

白く染め上がる世界の中で… フィーの涙が映った。

ぼんやりと、田に映る見覚えの無い天井を眺める。

ふと始めてココがあの世なのかと思った。

しかし思つたと同時にそりではないこと感じる。

理屈が如何いへ、根拠がどうだと云つ事ではなくとも、ただそう
思った。

ソレはあまりに自然すぎて…

否定も疑いも無いままにストンと心の裡に嵌り込んでしまつ。

生きてこると。

まだ死んではいないと。

それは確信的な直感。

無論いぶかしむ心は在る。

時と共に理性的な部分がこの今と言つ現状に納得のいく答えを求めている。

想い返される確かに在った過去と、いつ事實から来る結果に今が結びつかないから。

なぜ生きている?

確かに俺は死んだ筈なのに。

(……助かったのか?)

たぶんそれが一番シンプルな答え。

何がどうなつてかはまるで判らなくとも。

そうであることは覆されないであろう。

そう理解してしまえるからこそ困惑もまた大きい。

(なにが…どうなつたんだ?)

自身が負つた傷、アレは確實に致命傷となりつるンレだった。

自身で使つたあの術式もまた致命傷に至るレベルの威力を持つていたはずだ。

(なの元どりして…)

訳が分からぬまま、それでも皿身の身を確かめようとか、半ば無意識のままに手を皿の前に掲げようとし、感じた違和感。

そして次は意識的に。

結果は変わらず、違和感の正体も知れた。

手が…腕が…指の一本すら動かせない。

正確には動いているという感覚が無いというべきか、見ることすら出来ないため判断の難しい所か。

そうソレは手だけは無かつたという事。

首も足にもその感覚が感じられない。

正直言えば今時分がどういった体勢なのかすらもまるで判らない実情。

パニック直前の思考の混乱。

それでも何とか踏み止めたのはトラブル慣れしている自身の経験故にか。

(とは言えソレも当たり前か)

そう強引にでも今の状態を受け入れる。

(まあ確かに…あれだけの事をしたんだから、この程度運が良い方なのがもな)

元々死んでいて当たり前の場面だったのだ。

生きていただけで運が良かつたのだとも取れる。

そうそうなのだ。

でも…本当にそつなのだろうか。

心に浮かぶ不安。

自分自身がどうなっているのか判らないが故に。

どう助かったのか、また助けられたのか判らないが故に。

判らないといつ疑問は疑惑へと。

暗く黒い感情。

自分は本当に生きているのだろうか。

ただそう思い込んでいるだけではないのだろうか。

もしかして自分はすでに…。

心に重く広がる恐怖。

耐え難いほど不安。

本当の事が知りたかった。

何があつたのか。

何が起きたのか。

今どうなつてているのか。

どうしてこうなつてているのか。

全部全部。

なんでもいいどんなことでも…。

心がこの重圧に潰されてしまつ前に。

(あつジージ起きたつ)

「…………つー！」

突然田の前に現れた満面の笑み。

ソレは本当にこきなりで。

飲まれかけていた思考が一瞬にして硬直、真っ白になる。

（よかつたージージ全然起きないから、私また失敗しちゃつたんじやないかつてすつづ「ぐくドキドキだつたんだからー」）

大袈裟過ぎる程にダイナミックな動作で身振り手振り話し続ける少女。

その姿は、その顔は、間違い無く今回の一連の騒動の原因で。

（でもねでもねっ私絶対大丈夫だつて思つてたんだよつ。魂も命も身体だつて全然安定してて大丈夫だつたからねつ。それでそれでねつジージの意識がちゃんと目覚めてくれたから。完璧なの成功なのよかつたよーーー）

物凄い勢いで喋り捲つてきたあげくぎゅーっと抱きついて来た。

無論全身の感覚を感じられない現在の我が身。

どれ程の力で抱きつかれても何の感触も感じられない。

もつとも例え体がまともな状態だつたとしても果たしてこの少女の抱擁を感じられたかはなはだ疑問だが。

そう思つたも束の間、ガバッといつた感じでくつついたまま顔だけを上げる。

お互いの鼻がぶつかりそうな超至近距離。

（でもほんとーに良かつたー。ねつねつ身体なんとも無い？変な感

じとかしない？痛いと云つかない？苦しいとか気持ち悪いとか大丈夫？）

怒濤の勢い、その言葉がまさしくぴったりなぐらこの勢いで投げつけられる言葉の嵐。

何とか押し止めようとして声が出せないことに気付く。

少し考えれば当たり前かもしれない口も喉もまた。

感覚を一切感じられないまま、まともに動かせるわけなど無いこと思つから。

（ん？ どうしたの？）

そこまでの言葉に、何一つ返しの無い事に何かを感じたか、キヨトンと首を傾げつつ見下ろされる。

（ん～～…あつもしかして話せない…とか？）

ビンゴ。

と音づか指一本まともに動かせているか全く判らない。

もしかしてだけ瞬きとかも出来てないか凄く怪しい状況。

…痛みが無いってかえつてモノスゴクコワイデスネ。

（ん～まだ魂と身体の同調が上手くいくてないのかな～）

小首を傾げてチョット考えてます的な感じのポーズ。

何か知ってるっぽい口ぶりから何らかの解決策を期待せずには居られない。

例え相手が小さな女の子であつても。

といふか口に来てかなり正体不明感が急上昇中な何者かであつても。

素で藁にも縋りたい心境な訳だし。

(……まいか)

(まいつかってちょっと待ていつ！－！)

期待を込めた視線をあつさり叩き折ってくれた目の前のコムスメに渾身の突っ込み。

心の中の叫びでしかないのだが抑えようがなかつた。

だがそんな一人ツッコミに反応があつた。

(きやわつ！)

唐突な勢いで飛び上がる勢いで俺から離れ同時に耳を塞がれる。

(もへいきなりそんな大声だしちゃダメつ耳がキーンつてなつちやうじゃない)

耳をトントン。

頭をフルフル。

頬をピックリ膨らましてお怒りモード。

(大声って、俺話せてたのか？声出てるのか？)

可愛らしさが田立つて全然怖くもないフイーを軽くスルーしつつ戸惑い交じりの確認。

正直言葉を口にしている感じも全然感じない。

(……ム～ジージ意地悪。声は出でないよ。でも今みたいな感じで考えてくれば私にはちゃんと伝わってくるの。ジージと私はイッシンデータイっていうのだから)

無視されたのが不満なのか軽く睨みつつ、でも俺の疑問にはちゃんと答えてくれた。

とは言え意味不明な言葉の多くに訳の分からぬ部分も多々あつたが。

(今みたいになつて?)

(もう判んないの？だからそういうのだつて。えっと……心の中で話す様に？言葉を…考えるの？。ていうかもう出来るからそれで良いの？)

イライラが溜まり過ぎたのかウガーーって感じでフイーが吼える。

これは…ちょっと面白いかも。

思った瞬間、ギロリと睨まれた。

相変わらず全然怖くないが、それでも少しは控えた方がいいのか
も。

完全にとこいつ訳ではなさそうだが、それなりに思つてこることは
伝わつてしまつていい感じだし。

第5話・起き抜けの驚愕（前書き）

そしてついへんな顔へ

第5話・起き抜けの驚愕

(といひでやつときからずつと眞になつてゐるんだが)

興奮するフイーをなんとかなだめ、落ち着かせつゝ会話のペースをじりじり側に引き寄せせる。

如何せん判らない事が多過ぎでビックリするもない現状なのだ。

全てを知つてゐるとは思えないが今は少しでも手がかりが欲しい。

(ん? なになに?)

ようやく機嫌を取り戻したフイーは楽しそうに言葉を返す。

(お前、何で浮いてんだ?)

俺の視線は天井に向けられているはず。

確かに断言はできないが、それでも天井ぼい装飾の壁でもない限りはありえないだろ?。

まあ万が一本本当にそんな壁だとしてもフイー自身がビックリにも足をつけていないのだ。

プカプカフワフワと、さつきなどクルクルとアクロバティックな曲芸じみた動きまでして見せていたのだ。

(ん?えつと…だつてジージュぱり見てたから)

しかし返ってきた答えは、いつも不可解なソレ。

しかも「何でそんなこと聞くの」とも言いたげなキョトンとした表情。

うん、この時点で何かが明らかにズレている。

(あと透けてるよな。お前の後ろなぜだか普通に見えてるし)

(わう~)

更なる疑問を向けてもやはりそんな感じの答え。

加えて後ろを見たり自分のお腹を覗き込んだりと忙しない仕草まで。

(俺と会った時はそんななんじゃなかつたよな。なんていうか、普通だった)

小悪党とは言えあんな連中に狙われてたのだ。

決してただの「こじ」でも居る様な普通の女の下と開けっ放ではなかつたのだとと思つ。

思つただが…

それでも少なくとも見た田は普通だった。

しかし今日の前にいる少女は…

(もしかして死んでるのか？俺ら)

…どう見ても幽霊とかその辺の類にしか見えなくて。

故の結論。

自分としてはかなり認めたくはないが、多分最もありえそうな結果。

(む～死んではないよー。そりゃあ最初失敗とかしちゃったけど私頑張つたんだから。ちゃんと上手くいったんだから。だから死んでないもん私もジージも)

しかしながらそんな答えが気に入らなかつたのか再びパンスカ類を膨らますフイー。

(ああ、悪い悪い生きてるんだな俺もフイーも。じゃあ何がどうなつてるんだ？とにかくホント幽霊にしか見えないんだけど、今のフイー)

(幽霊じゃないもんつ。そりゃあ確かに肉体はないからチョット変わつて見えてるかもだけど、ちゃんと生きてるもん。といづかこっちの方が私の場合普通だもん)

(は～ちよつとソレドウ)

(むむう何？また変なコト言つての)

何気に聞き漏らしてはいけない様な、と言つて突つ込みどじる満

載な言葉に堪らずマツタをかける。

(待て待て落ち着けって、ソレより今…何て言った？)

(何つて何よ)

(だから肉体がないのが普通とかその辺)

直感的な勘。

ココがおそらく全ての根底に触れかねない質問であろう。

まあ勘とほ言つたものの世とんど確信に近い直感。

(だかららつきからそう言つてるぢやないの。私たちにしてみれば今が普通なの。肉体を持つてゐるのが特別なの)

ハツキリと断言するフイー。

しかし俺から…否、世間一般的に考えれば明らかに異質な感覚。

(… フイー お前 一体何者だ)

不意に湧き上がってくるは未知に対しての畏れ。

ただあどけないだけの少女が、唯それだけに見えない。

(う…… フィーはフィーだつてば…… なんか変だよジージ?)

(くつ變つておまつおまえ…お前の方がよつほど變だつついのー)

しかしそんな不安はフリーの変な人発言で軽く吹き飛ばされる。

(「うかお前にだけは言われたくないぞ）

(ひつじーいつ私のどこが変だつて言ひのよー）

ムスーっと顔を近づけてくるフリー。

そんな仕草に畏れなんて考えたことすら馬鹿らしくなる。

フリーは同じまでいつてもフリー。

もはやたとえ魔王だ神だといわれても鼻で笑える自信が出来た。

(全部だ全部何で浮いてるんだよつ透けてるんだよつと言つかゴロツキ連中に追われてたり結界まで用意されてたり死んだと思ったら助かってるのは全部が全部全然わかんねー）

そしてそんな自信もなんのその、とにかくわからない事全部ぶちまける。

叫べば少しは鬱憤も晴れるかと思ったが、声に出せないのがかえつてその量を増やしてくれた。

(ウガー——ツー——いうかホントに人間かお前はっ！—）

叫びついでにビシリと一言。

無論指一本動かせない現状気持ち的なソレでしかないが。

んでもうひそんな俺に對してフイーの

(人間?うつうん違つよ)

無茶苦茶普通に一言。

つーか更に加えてわかんねー。

(はあはあ……ていうか落ち着け俺。冷静に、冷静になつて……深呼吸)

上がりこ上がったテンションを何とか無理やり押さえ込むための血口暗示。

無論深呼吸も出来てるかどうか判らんからとりあえずしたつもりで。

(いいか、よく聞きて、ちゃんと答えろよ)

(うひうき)

余裕ゼロな俺と引きつり顔なフイー。

傍から見たらどんな修羅場かよと疑われるかもだが今は一人だけ、問題無し。

(お前一体何なんだ?何が目的だ?あと今一体どうなつてる?)

まずは最低限ハツキリさせたいと感じたトコから。

(えつと… フィーはフィーだから、それで……あつそういえばまだちゃんと挨拶してなかつたっけ?)

本当に今更だが、それでも答えは得られそうだからひとまず静観。

そんな俺に対してもピシッと序まいを正してからペコリと一つお辞儀。

(フィーはフィーリカ・テスタークスです。10歳です。お母さんを捲しに山から下りてきました。えつと後は……あつそつだ、えつと…あの…人間じゃなくてフュニックスです。これからずっとよろしくお願いします)

そして言い切つたとばかりの満足気な笑顔。

対して俺は…

(…………えつ…………はいい?)

啞然呆然。

(あはは～面白い顔～)

突拍子も無い答えに当の当人大笑い。

(…………フュニックスって…………えつ? ……マジ? ……あの、あのえつと幻想種… の?)

(うんつマジまじ～)

驚いた。

と言うか信じられない。

その存在 자체は知つてはいたし、実際会つてもいる。でもまさか田の前のコイツがとは全然信じられない。なんていうか全然子供なのに…

(えつと…証拠は?)

(証拠?)

(あ、ああ…ほらちゃんとフュニックスだって証明できる何か?)

(ん~…)

顎に人差し指をちょこんと、チョット考えてます的ポーズ。

(…あつコレなんか証拠にどう)

えいっと両手の先に出てきたのはこぶし大程の炎。

幻術ではない本物の。

しかし何も燃やさない。

『神炎』

それもむやみに聖属性、浄化の炎。

最高位の炎術士にまで至つてようやく使い手が見つかるレベルのソレ。

たしかに神炎そのものと言われるフューチクスは手足の延長の如く自在に操る。

(むむ～じゃあコレッ)

驚きのあまり硬直してた俺の反応からまだだとでも読み取つたか、今度は全身に神炎を纏い、その身を変化させる。

(じね～コレなら信じてくれる？)

田の前のやいつから変わる事の無いフリーの声が聞こえる。

(あ…ああ……)

その姿に俺は唯呆然とそう頷くしか出来なかつた。

決して炎を纏つただけのソレではない。

正真正銘本物の…

…炎といふ生命。

幻想種フェニックス。

その姿に。

コレは流石に信じざるを得ない。

(あつあとそれどジージの事なんだけどね)

言いつつ人の… 良く知る少女の姿に戻ったフイー。

それが今までとうって変わった、どこかすまなそつな顔。

(えつと……その…ね)

その仕草に今までの驚きも消し飛ばされる様な勢いで猛烈に嫌な予感を感じた。

何か… 本氣で、[冗談無いぐら]のとんでもない何かがと。

そして知る。

全ての過去を完全に凌駕するソレを。

この日この時この瞬間をもって、俺の人生は180度どころか振り切れ、くし折れ、あさつての方向へ飛んでいつてしまつた針の如く、全く別物のソレへと変貌したのだった。

第6話・迎える朝

目が覚めて。

そこには見覚えの無い部屋。

聞こえてくる小鳥が何かの轉りが朝の田覚めを意識させる。

「…………はて？」

意識は次第に明確に。

しかし「口」が「口」なのか思い出せない。

「ん~…………ん?」

そんな状況にもかかわらず身体は自然と田覚めの動作を。

ほとんど意識する」との無こままの仕草だったがそこに違和感を。

視線をやればお腹に顔を埋めたまま眠りこけてる半透明な少女が一人。

「……………ん?」

昨日…

と言つたか昨夜はフイーの正体やら俺自身に起きた事とかを聞いただけでイッパイイッパイだった為か、他の何かに気を向けられない

まま寝直してしまっていたことに気が付く。

ナウココガどこなのか？

どういった状況になつてゐるのか？

あの後結局どうなつたのか？

何一つ知つていなゝ事によつやへせりと氣付かされた。

まあ「止ま」で無防備を曝け出しているんだ、敵の手中と云ひつけられたら無いだらう。

少なくとも不安や恐れといった感情はフイーからは感じなかつたから。

「まつなににせよ闇かなきや始まらない事ではあるが。そう急ぐ事でもない… のか？」

判断基準であるフイーの能天気さが少し不安ではあつたのだけど。

それでも何所とも知れない場所で爆睡なんてこゝらなんでもしないだらうしな。

改めて部屋の中を見回してみる。

今まで横になつていたベッドとクローゼット、それと小テーブルと本棚、後は姿見の鏡と。

病院の一室かと思つていただがどうにも違つてゐる様子。

シンプルではあるが誰か個人の部屋を感じさせる。

「ん~状況が判らんっ！！」

現状に予測を立てている中脇腹に刺すような痛み。

何がつと布団を捲つてみればなんと…ついに思いつきつけられていた。

「やめこつ！」

一瞬呆けたが、その間もハムハムと寝惚け眼で食い付いて来るフイーの顔引き離す。

寝惚けてるせいか思いつきり食いついて来やがった。

だから、引き剥がす要領で軽く突き放してやつた。

ほんの…その程度な意識。

幸い俺もコイツも今は身体が小さっ。

ベッドの上も転げまわれるべうてにならどつもあった。

しかし起きたソレは全くの予想外。

手品か何かかのようにその姿がかきえた。

いきなり。

唐突に。

本当に何の前触れも無く。

「…………フイー？」

思春が一瞬呆ける。

すぐさま布団を捲る。

当然その中にフイーの姿は無くて。

ベッドの下。

天井付近。

部屋の中のどこも見渡す限り。

どこのにもその姿が見つからない。

「あ？ フイー… 何処だ？」

もう一度布団の中。

ベッドも叩いてみる。

変わらない。

出でこない。

「待て、マテマテ落ち着け俺」

動悸が、混乱が激しくなるのが自覚できる。

「落ち着け。落ち着くんだ…スーザー」

呼吸も少し荒くなつてる気がする。

「大丈夫だ、うん大丈夫だ」

自身に言い聞かせる。

そうフイーは唯の女の子なんかじゃない、あんなんではあるが幻想種と言われるほどの希少種だ。

だから大丈夫、傍から見て突飛ない出来事でもフイーにしてみればなんでもないことかもしれないんだ。

だから大丈夫。

だから… そうすぐにでも能天気な顔で飛び出してくるぞ。

呼吸を意識する。

心の平静を取り戻す。

深呼吸を数回。

それで心を落ち着かせるに至った。

「つたぐ、どうにも想像以上に参つてたみたいだな」

それとも平和ボケか？

自身を取り戻すまでにここまでかかるとは。

軽く苦笑。

戦時中であれば致命的過ぎる隙だつたな。

「さて…ホントこれからどうするかだが…」

貴重な助力がしばらく期待できそうに無くなつた以上一人で何とかしなくてはと再び部屋を見渡したところで…

『力チャリ』

…と軽い音と共に扉が開かれる。

「…！」

その音に全身が反応。

一瞬フリーかともいつ思いが頭を過ぎつた。

が、そつとは限らないと思い返し、解けかけた緊張を再び張り詰めさせる。

「……」

あと考えられるは「」の家人か。

フイーの態度から敵ではないだらう予想はつくが。

それでも自分にとって見ず知らずの何者かであることは違ひない。

更にはフイーの事もある。

騙されている可能性は捨てるには危険すぎる。

そして…

扉は開かれた。

「……………フイーリカ、目が覚めたようですね」

現れたのは金髪に多少の白さを混じらせた初老の女性。

高貴さも感じさせるその身なり。

纏う仕草も貴婦人のソレを感じさせる。

手にしているのは小さな片手サイズの桶か。

(誰だ?)

思わず口に出かけた言葉を咄嗟に押さえ込む。

相手が誰でどこまで知っているか分からぬ今、下手な言葉は口にすべきではない。

「身体の方は？痛い所、おかしな違和感などなにか異常とかはありますか？」

感情をあまり感じさせない喋り言葉。

表情の変化も小さく薄い。

言葉振りからして保護者かなにかかもと推測は出来るが、どれほどの関係の深さかまでは見極められない。

「……」

僅かに考えて首を横に振る事で答えとした。

理想としてはフリーの真似でも出来れば良いのだが、流石に無理がある。

だから出来るだけ無難に。

答えに関してはまあ信じがたくとも本当に異常を感じるのは本当だしな。

「…フリー・リカ」

しかしその答えに貴婦人の目が僅かに据わった気がした。

「……」

とたん反射的に背筋が伸びてしまつ。

「何ですその答え方は。言葉が話せなくなつた訳ではないのでしょ
う? でしたら返事はしつかり丁寧に。判りますね」

「は、はいすみません。大丈夫です問題ありません」

無表情に淡々と。

瞬間、演技もなにも素つ飛ばして答えてしまつっていた。

「……?」

そこに何かを感じられたか、しかし追求は無く。

どうにも流してもらえた様子。

「…まあ良いでしょう。ですが今は安静にしていなさい。後で調子
が悪く…まあフイーリカにはあまり似合わない言葉ですが。とにかく
今日一田は絶対安静にしている事。良いですね、けつして窓から
抜け出でたりとかは考えないよう」

ひりひりと連ねなれた言葉の後のやけに具体的な指摘。

多分だが実際やらかしてたんだらうなフリーのヤツ。

「まつたくあなたはいつも無茶ばかりして。それにいちいち心配し
なければならぬ私は身も少しあは気にしていただきたい所です」

と言つからざつにもかなりの問題児っぽい印象。

なんとなく思い浮かべられるその姿にわずかばかりの懐かしさを感じでいると、頬に冷たい何かが当てられる。

「…ひー」

「動かない」

反射的な反応も一括のもとに抑えられる。

そのままされるがままに顔を拭われ、髪にも櫛を入れられる。

「それでは後で朝食を持つてこさせますから。けっして外に逃げ出そうとはしないように。良いですね」

ビシャリと。

ただの眼光だけでそれだけの迫力を出した貴婦人はそのまま出て行つた。

普段の表情が平坦なだけにそのギャップだけでも威力は絶大か。

(…ふえ～…)

途端言い知れぬ開放感が全身の力を抜けさせてくれる。

心身ともにへ口へ口になりながらも扉の先。

あの貴婦人の出て行つたソコに視線を向ける。

「少なくとも悪い人ではなさそうだけどな」

小さく一言。

言葉遣いや身の振り方からしてそれなりに歴史を持つた貴族と言った印象。

主人かそれとも使用人かは、今の御時世から判断に迷う。

けど少なくとも心配はしてもらえていた。

「それにしてもまずは…どうすつかな～」

やるべき事は判っている。

とにかく現状の把握。

その為にはフイーを見つける必要がある訳で。

しかしあそこまで釘を刺している以上見張りぐらい居てもおかしくはなさそう。

まあ理想としてはフイーが…

「ジージーー！」

「つねり」

…出てきてくれたな、ウン。

第7話・幻想種とは

「ジージー！」

「つおう」

出てきて欲しいと思いかけて矢先に一弾キつと現れるフイー。

確かに望みはしたが、いきなり過ぎて普通に驚けない。

「ジージー酷いよつイキナリ落つ」とすなんて

しかしそんな俺に構う事無く「パンスカ！」立腹中な感じのフイー。

「私すつ」¹ベビックリしたしつぱい痛かつたんだからね

本人は真剣に怒ってる様なのだが全然怖くない。

と言つたそれ以前に今のその状態にもの凄くシッコミたい。

「もつもつ聞いてるのジージー」

「あつああ……と詫ひかなフイー」

「ん何？何か言いたい事あるの？」

「お前ソレビツなつてるんだよ一体」

指差してみる先。

「ん？…じいへ…じうもなつてなこよ」

そこを見てから改めてキョトンと見上げてくるフイー。

どこのおかしいのか全然判りませんといった感じのじ様子。

「いや、だつて…なあ？」

そんな雰囲気におかしいのは自分か？と思いかけましたが、それでも構わず思つたままを口にする。

「フイーお前、床に埋まってるだ？…下半身」

そう今こいつして姿が見えているのは腰から上だけでその下は床の中へと消えている。

「うふ？それで？」

「いや、おかしいだろンレはあきらか」

かなり直接的な言葉で言つてみたがやはり何も判つていなかの様なフイーの反応。

「だ・か・らつ何床から生えてんだよつ…」

ビシリと良い音でも響きそうな勢いでシッ ロリをこれる。

「むむ…んつあそか、ジージお行儀が悪いとか言いたかったんだね、アハハセンセーみたいでちょっとヤダー」

卷之三

凄く楽しげな笑い声と共にスルリと床から浮かび上がるフィー。

そんな、口口まできてもいまだ的外れなフリーの言葉に、一瞬だがツツ口//すら枯渇する。

「はあ」

ベッドの端にポンと着地するフイーをチラッと、これ見よがしに溜息をついてやる。

壁抜けやら浮遊やら…お前は幽霊かつての「

ん?全然違……違わぬくないね確かに

あつさり認めちやつてくれてますフイー。

そう言えは透けてもいるしな——なんて心の中でもう追加する俺。

ハッキリ言つて現実逃避たゞたりする思春

ちょっとほんのチョットだけでも何も考えずに居られる時間が
欲しい。

とは言え現実はそうそう思う通りにはいかなくて。

「私たちの種族って言つてみれば生きている幽霊？みたいなのだし」

また妙なことを言い出すフイー。

「ジージって、えっと……あの肉体と魂と……あれ? エットあと一つは……」

「命だろ、鍊金術における生体の在り様に必要とされる三体系の「あつうんうんそれそれそのさんたいけーっての」

嬉しそうに頷きパチパチと手間で叩き出すフイー。

何が言いたいのかはなんとなくだがその言葉だけで予想がついた。

「つまりなんだ、自分が生体の例外だからって事か?」

そう、幻想種と呼ばれる種族のもう一つの呼ばれ方。

『生体の例外』

その存在の在り様が故に、今だに生き物として分類するかすら学者連中の中では意見が分かれている存在。

そもそもの根底、『生体の三体系』とは生物が生きているとされる上で必須とされるそれらを大きくまとめたものの事であるのだ。

一つは肉体。

物理的存在であり物質的な干渉を司るもの。

基本的には生まれ持った身体がソレだが、それ以外にも鉄や岩、

結晶体など外的要因によつてそれらと置き換えられた物もまた肉体に分類される。

一つは魂。

靈的存在であり精神的な干渉を司るもの。

世界にはこの魂のみにて存在するものの在りはするが、それらは生命体とは認識されていない。

幽靈や精靈、神靈がそうである。

意思の存在は認められておらず、稀に意思を感じさせる行動を見せる時もあるとの報告もあるが、大抵は術者の意思の反映、又は自然現象におけるこじ付けとされるのがほとんどである。

そして最後の一つか命。

魂の受け皿にして肉体と魂を繋げるもの。

ソレがどの様なものが、今だ解明できるものも少なく多くの謎があるソレだが、魔術的にも鍊金術的にもその存在はハツキリと認められている。

この三つが揃つて初めて生命体と分類される。

ただ唯一、幻想種といつ名の例外を除いては。

幻想種、あらゆる方面から様々な謎に包まれた希少種。

学者の中には存在そのものを疑問視する声もありはあるが、それでもなお認められている存在。

彼らは基本的に肉体を持たない。

持つとしてもそれは後天的、自然体と言う意味合いでは魂と命のみの存在が自然な存在なのだ。

そうであるが故に彼らを精霊種と同等と捉えるものも居るがソレを否定する声も大きい。

中には生命体への進化の前段階であるとか、生命体の進化の先となる存在であるとかいう学説まで出てきているのだからなかなか面白い。

そんな彼ら、幻想種がそれでも『生体の例外』として言われるのには先天的には肉体を有しないという一点以外に他の生体との大きな違いが見受けられなかつたところにあるのだ。

確立した自我を持ち物質的干渉も可能であつた事。

更には後天的とはいえ肉体を持つ事が出来るいじょう、生体ではないと断言し切れなかつたのだ。

故に『生体の例外』。

「うんだからね、肉体が無いときは意識してないと物とかすぐすり抜けちゃうの。ちゃんと起きてるときなら全然問題ないんだけど、さつきみたいに寝てたりとかだとね」

「つまり寝てて意識してなかつたからすり抜けたと……じゃあ何で俺にしがみ付いてれたんだ？」

訳を聞いた上での疑問。

もしかしたら元々自分の身体だつたからだとかいう考えも浮かん
だものの説得力がほとんどない気がする。

「ん？ だつてジージ生きてるでしょ。なに寝ても絶してへ

「生きてる…あつあーあーーそつか、つまり精神的にくつついでいた訳か」

多少言葉足らぬだつたがなんとなく理解できた。

つまり今のこの身体にしがみ付いていたわけではなく俺というこの身体に宿っている精神にしがみ付いていたということらしい。

つたくなんつーかやせーじー。

「だからジージが寝てた私に何かしたでしょ。私覚えてるんだからねつ私ジージにぎゅってしがみついて寝たんだもん」

「いや、まあそりゃあフイーの事は引を離したが…」

妙に強気なフイーに思わずありのままを答える。

「せりやつぱつだーっ」

途端まるで鬼の首でも取つたかの勢いで指差していくフイー。

「フイーちゃんんだったの？大丈夫なの？」

そんな俺たちの騒ぎを聞きつけてなのかちょっと慌てた様な少女の声が扉の外から聞こえてくる。

（まずい、見張りの可能性をすっかり忘れてた）

戻ってきてからのフイーのハイテンションに引きずられっぱなしで警戒なんてどこかに置き忘れてた事実に今更気付く。

「あつ」の姫カナちゃんだ。うん全然大丈夫だよー

なにやうなけるのに困惑しているらしく、ガチャガチャと音がしぱらぐ。

フイーの声に何も反応をしないといふを見ると多分聞こえちゃいない様子か。

「フイーちゃんつーーー！」

多少長過ぎかな一泊を置いて扉は勢い良く開かれる。

そこから姿を表したのはフイーより少し年上か？見た目12か13才位だと思われる少女。

「カナちゃんただいまー」

現れたその少女にフイーが文字通りの意味で飛びついていく。

「フイー フイーちゃん！？」

「うそっ フイーだよー」

突然飛びついてきたフイーに田を白黒わせる少女、カナちゃんと言ったが。

おそれく友達なのであらう、そんな力ナちゃんとやりの反応をおもしろげに笑うフイー。

そして俺は… その少女がフイーの姿を田で追っていた事実に気付かされて頭を抱えていた。

(普通に見えるのかよ)

幽靈に近い存在との事で抱いていた希望的予測が木つ端微塵に碎かれる。

「フイーちゃんどうしたの？ 大声で騒いでて。何かあったの？」

「んー そんな事ないよー ただちょっとジージが意地悪したから怒つてただけだから」

「ジージ？」

呼ばれた事で反射的に顔が声の方へと向けられる。

「……」

「…………」

目が合つた。

「…………」

「…………」

少女の視線が再びフイーに戻される。

「…………」

「…………（汗）」

そしてまた俺に。

「…………フイーちゃん？」

「うんっフイーだよ」

視線で問われたのは少女の首に巻きついたままのフイー。

それでもう一度、一語一句違いないまつたく同じ問い。

「…………フイーちゃん？」

「…………違っ」

しかしフイーとは違う榨り出すかのように答える俺。

「あ……えつえつええ……あれ？あ……えつ？ええつ……」

俺とフィーを視線が行ったり来たり。

これでもかつてぐらいな混乱の様子。

フィーは面白がっている様子だが俺は心の底から溜息を吐き出しだくなつた。

「はあ~~~~~」

本氣で思つ。

(どうすればいいんだよ俺は)

この世に神様なんてのが居るのだとしたら俺は俺が思つていた以上にソイツに嫌われたのかもしれない。

なんと言つか……ふと脳裏に生き地獄と言つ葉が浮かんできたのはけつして間違つてないと思つた。

第8話・『私』の名前は？

「えつと… カナリア・リフィアスです」
カナリアと名乗った少女、件のカナちゃんがよろしくお願いしますと頭を下げる。

「えつ…と…………」カナリアをお願いします

なにか変に感じる挨拶、と詫つか名乗り。

とは言ひ俺もつられて同じ様に名乗る。

「えつとねジージはジージって言ひて私を助けてくれたの」

そしてそんな微妙な空氣などお構い無しのフリーは俺たち一人の間で二二二二と能天気に笑う。

「ジージ… ちやん？ ですか？」

そんな感じのフリーの言葉にちよつと困つたと言つた感じでカナリア。

「本名じゅや
」

「あっああ、違つ違つジージってのは「イツが勝手に呼んでるだけ

言いたい事を察し軽く笑いながら事実を伝える。

「では貴女のお名前は？」

「…………えつ…………と……」

それは何気ない問い。

本人にしてもただ何気ない会話の流れでの言葉でしかないであろう。

ただ、当の聞かれた側としてもれば言い淀むのも仕方ない問い合わせ。

(な……なんて……どうじょひ)

自分でも表情が強張っているのが良く判る。

すぐに返つてこない答えに「ん?」と首を傾けつつ素直に言葉を待つてくれているカナリアがそんな自分の様子に気付いてないっぽいところが多少の救いか。

とは言えこのまま名乗らないのはあまりに不自然過ぎるような気がする。

ジーニアスの名はダメ。

明らかに男名で、今の自分は子供とは言え正真正銘女の子の姿。

認めたくなくても変わらない事実に内心思わず涙。

フイーリカの名もダメ。

出会いの時にじつかり否定したし、目の前に本人も居る。

となると偽名だが…

「……んつ~?どうしたの?~えつと……ジージちゃん」

言いつかぬづけ。俺に對して心配やうなカナリア。

しかしながら、簡単に名前なんておもいつきはしない。

と、言いつかぬづけ。自体やつた事なんてない。

「ど~か痛いの?大丈夫?先生呼んで来ようか?」

ついにはそんな言葉までかけられる始末。

俺ももう必死で頭を廻らす。

それはもうもう何でも良いとばかりに。

条件は一つ。

女名である事。

ジージといつ呼びぬくなつづる事。

その一つに該当しそうなのは……

「……ジルコニア」

「ん？今なんて」

「ジルコニア…です。私の名前…」

ようやく思い至ったその名前を口に出す。

それは昔いろいろと周りの世話をしてくれていた侍女の妹の名…
だつた筈。

話しの中に、それもただの雑談の中で出てきただけな為結構曖昧
だが。

ちなみに一人称は流石に『私』とした。

『俺』という一人称がどれだけ今の自分に不自然かなんて指摘され
ずとも十分に判っている事だから。

「ジルコニア…………ジルちゃんですね」

パチンと両手を合わせて満面な笑みのカナリア。

名前が判つたのがそんなに嬉しいのか。

「じゃあ改めてよろしくです。ジルちゃん」

「えっと…」ちひりーそ

差し出された右手を、ギュッと握り返す。

「あーっ一人だけでなんてするにずるーー」

そんな俺たちの手にギュウッとしがみついて来るはフイー。

「わっあわわっ」

フイーの突然な乱入に驚き、勢いのままに尻餅までつくカナリア。

「あははそうだな、フイーもだよな」

そんなフイーのテンションにいい加減慣れ始めていた俺は動じる事無く苦笑交じりにフイーの頭をポンポンと軽く撫で叩いてやり。

「大丈夫か?…カナちゃん?」

カナリアへとぼけた右手を今度はこちらから差し出す。

「…………はいつありがとうござります」

一瞬の呆けはあったものの、いかの意図に気付くと同時に満面の笑みでそれに答えてくれた。

「あつそつだ朝ご飯。ちょっと待つて!」

そこで思い出したかのように、と言つか実際思い出したのであるドアの外へと何かを取りにトテテと走っていく。

まあソコに何がといづのはまあ先の言葉通りの物だらつ。

しかし…

「リフィアス…か」

口に出たのは始めて教えた力ナリアの名、その家名の部分。その家名には聞き覚えがあった。

と言つかる程度のレベル以上の魔術士やそれなりの権力者であれば知らない方が少数とさえ言えるほどに有名な名だ。

「となると…多分だが予測はつくな」

断定は出来ないが、それでも先程までとは手掛けりのレベルが雲泥の差だ。

たつた一つのそれだけではあっても、流石にリフィアスの名は大きい。

リフィアス家。

おそらく魔法に関わる者のほとんどが一度は耳にしているのではないか。

かつて世界の魔法の根底とまで言われた研究教育機関。

サニア魔法学院。

その発展を支え、担い続けてきた一族らの代表にして中心となっていた家系。

「学院が潰れてから10年少し。流石に建て直しもそれなりに進んでいたと言う事か」

そう當時栄華を誇っていた学院は既に昔のものと言つてもいい。

当時…と云つよりいか戦争が本格化されだしてきた頃からか。

その研究機関としての一面向により敵國家より常に狙われ、戦時最大にして最長に亘る激戦区として在り続けた。

そしてそれも10年前の大攻勢よつて決着がつけられていた筈。

とは言えソレはもはやそれだけの年数を経た過去。

その上戦争自体も一年とはいえた過去。

こわさか早過ぎる気はしないでもないが、それでもある程度復興の形は整えられ始めていたと言つ事か。

「まあリフィアス家が生き残っていたのならあり得ない事でもないか」

それだけの影響力は確かに考えられるから。

「ん~ジージビしたの?」

声に皿を向ければ少しつまらなさつてフィーの顔。

苦笑混じりになんでもないと頭を撫でてやる。

「でだ、口は…」

「お待たせしましたー」

フイーへの言葉は言い切る前にカナリアの言葉に覆い被せられる。

まあ急ぎとまではいかない事ではあるし良いかと。

「朝ご飯…えっと一人分しかないけど大丈夫です?」

手にしているのは少し大きめの盆。

視線の先は…フイーか。

なんとなく言いたい事は判つた。

「えつ…と…どうなんだ?」

とは言え幻想種の食事事情など俺だって判らない。

となるともう本人に聞くしかない訳で。

「ん~そりゃあもちろん私だって食べたいよ。でも無理だから。ジージ全部食べて」

人差し指を口に、凄く物欲しそうに言われても…

ハイそうですかと手をつけられる筈も無く。

「いや、食べたいなら食べたいで一緒に食べれば…」

「そうですよ、無理はダメです。らしくないですよ。それに足りないなら先生にお願いして追加で作つてもらえれば良いだけですし」

「んーだから無理なの。食べられないし、食べる必要も無いの。食べる為の身体もないし食べて維持しなきゃ身体も無いんだから」

「え? なにそれ」

フィーの言葉に少し困惑気味なカナリア。

事情を知らないが故に仕方の無い事か。

反対に事情を知っている俺としては天を仰ぎ見るしかない。

「そつか… そうなるんだな」

言われば確かに納得できる事ではある。

「え? え? ジルちゃん分かったの?」

困惑気味なカナリアにどう説明したらいいか。

「ジージー」飯食べるんでしょ。私ちょっとお散歩行って来るから~

場の空氣感じたのか、単なる天然か、当の本人はそんな俺たちを置いて壁に向こうに。

「ええっ! フィーちゃんっ! ? ジルちゃんどうこう」となんですか?
?」

ただでさえ分からぬ事だけの中更に壁抜けまで見せられて混亂に拍車のかかるカナリア。

「つたくアイツは…ほら、カナリアも落ち着いて落ち着いて。な、ホラ深呼吸深呼吸」

そんなカナリアをなだめ落ち着かせながら先程のアレは天然だつたんだな」と遅ればせながら確信に至つたりするのだった。

第9話・その一人

「でも本当にそつくりですよね」

食後のお茶を飲む俺の顔をジッと見ているカナリアからの感嘆のため息。

まつ当然と言えば当然なのが。

何せこの外身、当のフリー本人のものだから。

「その辺りはな… まつ色々あるんだよ色々とな

苦笑交じりの言葉に若干の言い難さを混じらせて。

「」のまま遠慮してもらえれば御の字。

さらに欲も言えば都會の良い感じに勘違いもしてもらえたらいつた感じか。

軽めの朝食も終え、食後のお茶の一時。

「」今までくれば流石の力ナリアも余裕を取り戻してくれる様子。

朝食を置くだけ置いて「フリーちゃん搜してきますー」と飛び出されたときは一瞬本気で追いかけるべきか迷った。

結局はそのまま放置。

と詰つか止直止められなかつた。

何せ氣づいたら最早ただ足音が聞こえるのみで姿は見えずな感じ
だつたし。

まつ結果としてこれで良かつたのだと私は思ひはしたけどな。

なにせ経験上、こいつこいつはどうちらを選んでもトラブルとこいつ咎の騒動に巻き込まれる確率が高かつたから。

それならなおの事、空腹は満たしておきたいと思つ自分はおかしくないだらうと思つ。

以前似たような状況で結果三日三晩食べ物はあらか水の一滴すら飲めなかつた時の事が一瞬脳裏を掠めたせいでは決して無いと思いたい。うん。

「でもフイーちゃんより落ち着いて大人っぽいですし…やつぱりお姉様なのですね」

聞いてはいけないと感じつつも好奇心を抑えきれないのか。

遠慮がちな、しかし消えることの無い言葉。

こんな所はまだ幼さを感じさせるな。

「……まあ肉親といつても良い様な感じではあるのかな…多分…ちよつと微妙な気もするけど」

元は別とはいえ、自身がこいつなつた経緯を思い返せばそんな言葉

も出でへる。

苦笑交じりなのは血体の滅茶苦茶かと一息付けるだけの現状故か。

「はあそつなのですか?…ではこの度はフイーけや…あついえ、フイーリカを迎えて」という事なのでしょうか?」

「あつああ、あんま畏まりなくて戻いかれ。それとフイーの呼び方も言ひ易い方で…なつ」

「すつすみません」

これまでの自身の言動か。

それを改めた事か。

またそれを指摘された事なのか。

途端に恥ずかしそうに顔を赤らめ始めるカナリア。

率直に可愛らしさと思える仕草は微笑ましい。

「とにかく迎えかにつけのまづいこいつだ?」

言葉の内にあつたソノを率直に尋ねてみる。

「えつ?ジルコニアをもつてフイーちゃんのお姉さんなんじょ? ですから家出したフイーちゃんを迎えて来た…とかそういう事では……ないのですか?」

「あつやこつ事」

カナリアの言葉に軽く納得。

なるほどなるほどやうこう風に捉えた訳か。

「んーまつやう言つ事じやないんだけどな。フィーとは今回の事で始めて会つたんだしわ。やうこう意味では家族つて訳でもないのさ」

「え？え？え？」

無茶な言い訳に案の定訳が判らないといった感じなカナリア。

「んっだからホント色々とややこしい事とかあるからあんまり聞いてくれない方が助かる」

「あつすみません」

流石に直接的な言葉は恐縮させるか。

とは言え正直になど話せないのはやうじようもなし。

前夜（？）の小悪党同様、幻想種の…中でも特にフュニッシュクスは狙う者が後を絶たない。

存在自体が伝説や噂の類と言われているにも関わらずだ。

なにせ不老不死の体現とも言われる。

事実、伝承、噂、様々な形で生命の奇跡を成した種と謳われてい

る種族。

実際救われた俺だから確信は持てているが。

そうでない…ただ伝承のみを鵜呑みに、真剣に信じ追い求める者が後を絶つことが無いのだ。

さらに最悪なのが、そういう輩が権力者の中にこそ多いこと言う悪夢。

フイーのことも俺の事も露見した時点で最悪な未来しか思い当たらない。

しかも昨夜のあの小悪党。

あきらかに背後に黒幕がいた様子。

どこまでフイーの事を嗅ぎ付けていたかは判らないだけに警戒は怠れない。

「そういえばフイーのヤツにつかづいて？結構長かつたりするのか？」

ふと思いつ部分もあつて今度はこちらからカナリアへ。

「あついえいえフイーちゃんが家に来たのは…つい最近です、ハイ。えつと…たしか一週間くらい前の…夕方頃でしたかしら。何でも街外れの川原で野宿しようとしてた所を保護してきた…とか?たしか」

多少記憶が朧気なのか詰まり詰まりながらの言葉。

(一週間か…)

一生懸命思い出そうとしてくれているカナリアには悪いが状況とかその辺りは今はいい。

必要なのはフイーがリィフィアスの庇護下に入つてどれだけかと言つところ。

(準備期間が長引いたとしても…それでも脱走のタイミングに合わせていた感じだつたしな…)

タイミング的にフイーがリィフィアスの庇護の目から離れる時を待つていたと考えられるか。

背後の権力の大きさはともかく、それでもリィフィアス家の内にいればそう簡単に手は出ししてこれないだろうから。

例えどれ程の相手であつたとしても、無茶な騒動を力ずくで抑えられる相手ではないのだリィフィアス家は。

全盛時代からの影響力は一国等といつ枠では治めきれないほどに広く深い。

ある意味において神聖教会とその在り様が等しかつたとさえ言い表せると俺自身は感じていた。

しかしだからこそ今は下手に動かないほうが良い。

「チラが尻尾を掴むのが先か。

アチラに出し抜かれるのが先か。

何にせよその時には一騒動起きるであらうは確実。

問題は「」の身体で「」までやれるかだが…。

「つたぐ、何だつてこいつ次から次へと…」

本当に、頭痛のタネには事欠かない。

「まつなんにせよ今一番の厄介ダネが現在進行形だつてのがな～」

「ん? ビハしたんですね? ジルロニアさん凄く難しそうな顔をして」

「ん? ああ、メンメン顔に出でたか」

心配気な力ナリアに「ちよつとフイーの事でねー」と軽い苦笑を表情に浮かべてみせる。

「あ…ごめんなさい。やうですよねフイーちゃんもあんな風になつて大変な時だつて言いますのに…フイーちゃんもきつとつらうに思ってしまいますのに…」

「あー…いや、それに関しちゃ大丈夫だから。アイツ全然気にしてないからセツホントちょっとくらいうきにしてくれても良いと思えるぐいここいつ」

先の一言をどう捉えたのか涙ぐみ始めた力ナリアをあわててフォロー。

まあ言葉 자체は取り繕つまでもない本心ではあるのだナビ。

「本当に、少しひぐりに大人しくしてくれてねば楽なんだけだな~」
階下の広間でペットのネコとじゃれあつているらしさにフリーの姿
を思ひに写しながら。

「…飽きてでもつらうから外に出してなきゃ良こナビ」

思わずしてポロッとでた言葉。

何故だろ?、そんな情景が凄くリアルに思い浮かべてしまつ。

「わつわたらしつちゅうとフイーちゃん呼んできまわ」

カタリと立ち上がつたカナリアの慌てた様な焦りながらな様子。

どうやら想いは同一だった様だ。

「あつたくホント氣が休まる暇もない」

フリーと出会いでココこれまでの時の端的な感想。

その上心の何処かで「何時もの事だらう」と呴こてこむ自分もいて…。

「ホント少しひぐりに相手できたうまじ…こやせつでもないのか
な~」

もう少し楽で利口な生き方が出来たらとは思つが、だからと言つて結局ほつとけなかつたから今が在る訳で。

「結局性分なのかね〜」

苦笑交じりに菓子を口に。

過去も思い返してみれば似たような事ばかり。

「なんにせよ狡賢く見て見ぬ振りなんてヤツにはなりたくもねえしな」

例えそれこそが平穏への最短距離だとしても。

「やつぱ性分だな」

結局は事の大小大きさの違いだけで。

神様への恨み言は数在れども後悔はそれ程でも。

浮かべた笑みは随分軽かつた。

第10話：エスアリア

コンコン

カナリアが出て行つてしばらく。

ノックの音が部屋に響いてきた。

「ん？ カナリアか？ どうぞ開いてるよー」

フリーを何とか引つ張つて来れたのかと軽い感じで入室を許す。

すぐに入つてこようとはしない辺り嬢の丁寧さがうかがえる。

（フリーを抑えとくだけでも大変だらうに）

そんな扉の向こうの情景に内心で笑みを漏らしながらそつと待つ。

そして…

開かれた扉の向こう。

そこには確かにカナリアがいた。

フリーもいた。

ただ予想外はその二人を間に立つ一人。

「色々と聞きたい事があるのですが… よりしいでしょうか、ジルコニア嬢？」

確か出掛けている筈のエスアリアがそこに居た。

感情をあまり窺わせない少し冷めた様な表情に平坦な声。

相変わらずな印象そのままの姿でそこに居た。

言葉はあくまで響ね口調。

だが拒否権など欠片ほども見当たらない。

「カナリア、フィーリカ、これから少しへジルコニア嬢とお話しがありますので、しばらくカナリアの部屋に居てらっしゃいな」

両脇に控えていた一人もまた同じ印象だつたか、言葉をかけられるなりすぐさま踵を返して行く始末。

「さて、まずは何から伺いましょうか？」

改めて視線を向けられ。

背筋に一筋汗が流れた気がした。

そして

■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■

……

：

吐かれました。

それはもう見事なまでに。

一から十まで全部が全部。

フリーとの出会いから夜の一件の最後に到るまで。

隠したい事からバレたら素で洒落にならない所まで何もかも。

フリーの事は……まあ気付いてたみたいだから良しことしよう。

しかし俺自身の元の素性まで明かされた時などマジで終わりかと思う感じた。

と言うかだ、例の夜のいざいざを一通り話しあがつたで」「どう事は貴方は魔王ジー二アスという事なのでしょうか?」等と余りに直接的な、あり得ないほどにペンポイント過れる言葉で思考が一気に吹っ飛んだ。

動搖は一瞬…なんともんじやなかつたな、ウン。

多分それが完全な命取りと感じた。

「……まさか本当に?」

次いで告げられた再度の確認の言葉に最早頷くしかなかった。

その一言田には確かに確信的をもつてしての確認の意が感じられてしまっていたから。

その瞬間本気で自分の選択ミスを悔やんだ。

何せそれは一言田であったのならばこの場においては誤魔化していた事を知らしめる言葉でもあったから。

しかもかなり容易にだ。

「…………」

「…………」

「…………本当なのですね」

長い……一時の間を置いて。

ついこの元の言田。

俺もまた再度首を縦に振る。

「ああそうだ、確かに俺の名はジー・アス・クルスセトだ。魔王といふ通り名は本気で甚だ不本意で認めたくないがな」

ひつしてお互いがお互いを正確に認識した上で真正面から向き合つたのだ。

もはや誤魔化しなど何の意味もない。

ただ腹を決めるのみだ。

正直、今この状態で逃げ出せると思えるほど甘い考えは持ち合わせては居ないのだから。

そして改めて始められる。

問い合わせという名の尋問…

いや、むしろあれは拷問と呼んでも良いかも知れない。

本気で本当に、これまで経験したこともない程に苛烈な時だった。

流石とこりかなんと言つか。

どうしてこう教師という人種は…。

「まったく…多少は聞いていましたが、本当に世間一般にて囁かれている人物像とは随分とかけ離れていますね」

「それともそう見せているだけですか?」

紅茶を注ぎ足しながら呆れた様な溜息。

少しもそつは思っていないのが丸判りだ。

「なんだよその人物像ってのは

思わず聞き返してしまった。

なんとなくいやな予感。

と言つた、ろくでもない答えが返つてきそつで。

「ですから一般的な貴方への印象ですと言つてはなこですか」

強調する様に改めての言葉。

「幾つもの大陸、國と言ひの國を巻き込み世界中を争いと混乱に巻き込んだヌーム帝国の影の支配者。凶王ガルバストロスを影で操り、終焉終末の巫女をかどわかせし真なる黒幕。その性格は残忍にして狡猾。時に自ら世に降り立ち、騒乱の火種を撒き散らす様は悪鬼の如く…と、まあ大体の所この様な感じですね。幾つかの逸話も耳にしていますが聽きますか？」

当たり前の事を当然の様に語るその言葉。

ただ淡々と語られると何故か真実味を感じてしまうのは俺の気のせいだらうか？

いや、まつ事実無根だつてのは俺自身ハツキリクツキリ判つてますよつ。

ただまあそんな風に語られちゃうと…

恐るべしと素直に認めてしまつべきかどうか。

「いやイイです。聞けば聞くほど凹みやうだし」

勘弁して欲しい気持ちに押しつぶされるように布団に顔から突つ伏す。

「まあ、こいつして見る限りとても尊で語られるような悪鬼羅刹とは見えませんけどね」

「んなの当然だろ。デマだデマ、一から十まで全部が全部な」

「まつたくのところには少し疑問を感じますが、まあ確かに貴女の言葉の方が真実には近いのしようね。最も貴女が本当に魔王ジーニアス本人であるというならの話ですが」

相変らずな平坦な話し口調。

しかしわざかに垣間見えた愉快そうな声色に顔を布団から横にずらす。

「まだ疑ってるんだな、そこん所は」

「当然でしょう。信じるには余りに奇天烈な話しです」

「まあそうだな」

その言葉には激しく同意をしたい。

たとえ俺自身の事であつても。

「んでどうするんだ? 悪名高い魔王がこいつして無力に伏せてるんだ、

捕らえられたにしても殺されるにしても抵抗しない抵抗は出来ない
「ゼ」

余裕ぶつての言葉はしかし真実でもある。

最期としてはかなり情けないものではあるが、まあまともな終わり方などありえないとは思っていた。

覚悟なんてしてた訳じゃない。

潔さなどに囚われてなどいない。

生を汚くとも足搔くだけ足搔くことは常々思っていたことだ。

しかし…

「流石にこの状況、チョックメイト以外ないだらうしな」

不思議と笑えている自分の内面は自分でも良く判らない。

ただ在るがまま、それだけだった。

「まつ好きにあると良いから」

眞つで、トサッと身をベッドに沈める。

諦めたといつ感じではない。

ただ会話の終わりを行動で表しただけ。

そして最後の言葉を待つ。

自身がどうなるか…

(なんとなく何を言われても受け止めつけまいとするナビ
な)

わざかな仕草の気配。

審判の時。

その瞬間。

そして俺の心持など言葉通り、ただ気がしただけの事だと痛烈に
感じさせられた。

「それは願つてもないこと。では私の元にて魔法学の探求の手伝い
をしていただきましょうか」

「はあっ？」

「あら、どうしましたかその様に声を荒げて」

「手伝いって……えつ……なんだよそれ、んな出来る訳が…」

それはあまりに意外すぎる提案。

意外といつかあまりに危機感の無い考え方。

最もそう感じたのは俺だけのようだ。

「そうでしょうか？先の大戦で多くの先人や教えが失われたのです。深い知識と経験をもつ逸材を私が見逃そつはずがありませんと思いますが？」

目の前の淑女は当然の事と逆に首を傾げてさえ来る始末。

「そつそつやそつかもだが…良いのかよ、問題になるなんて生易しいレベルじゃねえぞ」

それこそ発覚し次第、俺共々逆賊として世界中を敵にしかねないほどの。

加えて既に魔王としての自分の事件への干渉がビックからか掴まれている現状。

正直、真相の露見も時間の問題か…

それとも既にか…

ともあれ隠しきれる状況など、とおに過ぎてこると思われる得なこと言ひうのこ。

「何故ですか？」

しかしそんな俺の懸念をもヒースアリアは軽く笑みを浮かべるだけ。

そのあまりの反応に感じるほ軽い苛立つ。

「何故つて…そつやお…氣付かないはずがないだろう。俺が…」

「ええそれは確かに確認しましたし」

感情のままにぶつけようとした言葉は、しかし絶妙のタイミングでその言葉尻を取られ。

「あなたが…おそれくなにかしらの原因にてでしうが、自分自身を魔王であると思に込んでいる十数歳程のただの女の子である事は。ええそれはもちろん。で、何か問題が？」

あまりの言葉に一の句が次げない。

「…………つまり信じてないと」

それは俺と言つ成り立ちの否定。

「ええ信じませんとも、私にとつてその方が都合が良いですから。貴女は違いますか？ジルコニア嬢」

「…………違わない…けどよ~」

改めて言ひ含められた言葉。

なんとなしにその意図は掴めた。

しかし…

「なら良いではないですか、普通誰も信じませんよ。それとも魔王といつ地位に未練が？」

そんなもの……それじゃ考えるまでもない。

首を軽く横に振り、改めて見上げるその顔は無表情ながら何処か可笑しそうに見えて…

「よつこい、初めましてジルコニア嬢。リィフィアス家当主として貴女の新たな門出、歓迎させていただきます」

最早言ひ返す氣すら起きない。

「…勝手にしれ」

「ええ勝手にしますとも。それは貴女が言ひ出したことですから」

「まつたく本當に…」

(…随分と逞しい女だ)

言葉の続きを心の中だけに。

この場合、流石と褒めるべきなんだろうな。

第1-1話・真相の裏側

「… なあ幾つか聞いていいか?」

ソレは言葉遊びのよつなやり取りもよつやく終わりを見せてのこ
と。

わざかな間の後の一言。

「ええ、じつぞ」

返答は相も变らぬ様子であつたつと。

「もつとも事が事ですので望まれるまことにお答えできぬ部分もある
でしようが」

続けられた言葉の裡になんとなく気にかかるモノを。

「ですがジルコニア嬢が一番聞きたいことに關しては問題ありません。
と言いますか聞かれる意味もそういうものではありませんしね」

そして言葉の最後まで聞いてみてその感じたモノの招待にも当た
りがついた。

予想が付いているのだろう、俺の内情について。

答えられないこと言つのは事件の事だろう。

なにやら單なる小規模なイザ「ザ」というのは一コアンスが重そつ

だが。

そして聞く必要の無こと言ひつけられ……

ダメだ、思い至る節が見当たらない。

確かに俺自身を真なる意味で知るものは極わずかだりつ。

しかし聞くまでも無ことでは絶対にあつえない。

何せあらゆる意味で死活問題。

はつあつせせておく必要はないからもある。

そんなこと、田の前の彼女にも判つきつてしまつた。

それともほかになにか隠しだまでも？

「聞く必要が無いことは？」

(…………まあいい、それもソレもじきに見えてくれるだらう)

まずは相手の答え次第。

「なんにせよ俺にとつても「ハイそうですか」で済ませれるほど軽い話でもないわけだしな。それでもはつきり言葉で聞きたい

一 田 言葉を区切り、言葉に強い意識を乗せる。

言葉そのものに力を込める言葉と言つ技法。

専門外故に効果に関して期待は持てずとも、真剣とは伝わってくれるだらう行為。

「まず……何故俺の話から魔王の名が出てきた？」

それは先程の尋問紛いの問答での最中のコト。

「少なくとも俺はソレをおわす様なコトは一言たりとて言つてなかつた筈だ。少なくとも断言しても良いことと思ふぐらくなは思つてゐるぞ」

そう、こうして事後の説明を求められていることに関しては、非常に遺憾ながら結構経験豊富だつたりする。

と言つよつは過去のそれらに関して言えばたいていの場合やうこ悪質だつたりするが故にまだまだぬるい。

ミスはなかつたはずだ。

「もしかわらぎ……

「それでもその名が出てきた。別にこの街を拠点にしている訳でもなく居を構えているわけでもない。変なトラブルにだつてこの街では今回のが初だ」

そう、不本意ではあるが知名度とトラブルには事欠かない俺ではあるが来て早々そう立て続けのトラブルなど……

…少なくともこの街では遭遇してはいない。

そのつえ魔王の如など、そいつをう挙がるものでもないのだ。

第一尊と現実では天と地との程のギャップがあるのだから。

それじゃ當時の顔見知りでもなければといつレベルである。

「おやらぐ……そだだと想つが、貴女からのまつきとした言葉で確
信したい」

予測はつべがあえて言葉にしぬままに聞く。

誤魔化しや有耶無耶な答えで煙に巻かれる」とほど危険な事はないから。

本当に悲しいコトながらそれが俺の立場なのだ。

真実はどうであれ世間一般に認識されているソレは先程のエースアリアの述べた言葉そのまま。

語られはしなかつた逸話とこのもまた似たり寄つたりなもの
俺自身の幾つか聞いたことがある。

知り合いからのからかいであつたり無関係の他人からの噂話だつたりと、経緯は色々だが。

更に面倒臭いコトにそれらは一〇〇%嘘の出鱈田だけじゃない所
なのだ。

もつとも内容はこれでもかってほんとに捻じれ歪みまくってる訳だ

けど。

故に魔王と俺とをイコールで結ばれると真剣にヤバイのだ。

それは素で死活問題。

在り様が在り様だけに國そのものが動くといつのも普通にありえる話になつてしまふ。

まあ以前はともかく今の自身では三流の刺客ビリュカ一般人一人をすらビリュカできなさそうではあるがな。

「あとは今回の騒動についてもだ。連中らはあきらかにフイーリカを特別な存在として狙っていた。ただの人攫いなんかじゃありえない、わざわざ封魔結界なんてものまで用意していただくらいだしな」

あれはただの人攫いなんかじゃない。

幻想種相手にとしては手段と対策は的外れではあったが、確かにあれは子供一人を攫う準備ではなかつた。

「そして今俺への応答。魔王や幻想種の関わりまで予測がいついて、このやり取りはあきらかに不自然。そう、もし関わりが表ざたになつているとしたら例え巻き込まれただけの可能性のある少女に対してもただ普通に話を聞くだけというのはありえない。

逆にそこまで調査が到つていなかつたとしたら魔王の名が出てくること事態がそもそもありえない」

感じた違和感を一つ一つ言葉にしつつ。

先程の尋問を経た俺に油断はない。

「聞くまでの意味はないと言いましたが、どうやらひつともなかつたようですね」

エスアリアの軽い溜息。

「どうやら随分とお互いの認識に隔たりがあるようですし…。そうですね、お話ししましょう、今回の私たち側からした事件の認識を」

言いながら脇の椅子を引き寄せ静かに腰を下ろす。

どうにも長くなりそうな予感。

「ジルコニア嬢も楽にしてくれてかまいませんよ」

かけられた言葉はソレを確信へとえてくれて、俺も聞き易い姿勢へと身をすらす。

無論警戒は解くまではしないが。

「ではあの方が来られるまでの間、少しお話しする事としまじょうか」

ソレは語り始めの為の一言。

そこになにやら聞き流せない一言が混じっていたが、エスアリアの続けられる語りに話の腰を折り損ねた。

「私どもが事の異変を感じ取ったのは…おそらく貴女が最後の魔法

を使ったその時になりますでしょ。当時フイーリカを捜していました所に感じた一種類の魔力。私が現場に駆けつけた時には貴女がおっしゃっていた通り氷像と成り果てた不当者らの中心で氣絶しているフイーリカを…貴女を見つけ保護した次第です

「…一種類の魔力？」

「ええそうです。おそらくは後のソレはフイーリカのモノでしょ、件の…貴女の元の身体を灰にしてしまったといつ…」

「…ああ、更に言えば俺の魂を血の内に取り込む行為のも含めてだろうな」

「でしきうね。その後同じくソレを感知してでしきう衛兵が駆けつけ調査が行われる事となりました。状況こそ多少特殊な状態でしたが仲間内の仲間割れか何者かに返り討ちにあつたかという結論にて翌朝から周囲の警戒と魔術式の行使者の調査も兼ねて巡回する事としたぐらいで、そう重要視される問題にはなりませんでした」

そう、さうなること自体は予測の範囲内。

戦が終わりを見せたといつてもそれはほんの一年前でしかないのだから。

争いは世界中でいまだ収まりきれていないし治安も決して良いとはいえない。

「まあそつだらうな、普通なら」

そう普通なら。

」の程度の規模、魔法使いが絡んだ事件においてはありえないレベルでは決してない。

「……で、何故そつならなかつたんだ？」

しかし今回はそつは捉えられなかつた。

「何故か…それは翌朝、騎士団並び常駐所に駆け込まれた者からの報告…被害届けが原因です。駆け込まれた者は合計で6人。彼らの訴えはこうです「自らの主人、もしくは知人が凍てつき死んでいる」と」

「おっおい、翌朝つて…そんなに経つてているのか？昨晩のことじや…ない？」

「ええ、事は既に二日前の事となつております。しかし被害については驚かないのですね」

俺の発した問い合わせの方向に少し意外とばかりに言葉が投げかけられる。

「ああ、なんとなく何がどうなつたか俺も判りかけて来たからな。そこそこは少し考えれば確かにあり得る事態だつて気付いた。まつ一応その魔術式の行使者だしな」

そう、それは確かに考えられる状況。

といづよりむしろ予想以上に狙い通りだつた結果だ。

「あの魔術式は決して無差別に凍らせるだけの力押しのソレじゃない。特定条件…今回はフイーリカを狙っている奴等を対象に、縁の糸を伝つてその相手全てに牙剥く様組んだソレだ。おそらく他の連中もアイツらの関係者もしくは協力者だつたりするのだろう?調べはついてるか?」

「いいえ、まだ被害者の関連性などについては明らかになつていなughtです。それにその中の2名は貴族に連なる方々でしたので、そつ無闇に踏み込めるものではありませんでしたから」

「貴族…か…なるほど、とするとあいつらは雇われ者とかそんなんじやなく私兵とかそんな感じの関係だったのかもな」

エスアリアの言葉は文句無しに上出来な結果が得られた事を俺に教えてくれていた。

「…どうごう事です?」

そしてその満足げなつぶやきに怪訝な顔をするエスアリア。

「ん?ああ言つただろ、あの魔術式は縁の糸を伝つてその先にいる対象に牙を向けるソレだと。今回の場合はフイーリを狙う者、その身を得ようと縁を伸ばしフイーリカに拒絶されていた者たちだ。まつ最も他にどんな仕掛けが在るか判らなかつたからあの場の近隣一帯は無差別に全てを凍てつかせたがな」

そんな自身を振り返つて軽く苦笑。

「まあ何者か、背後に黒幕の一人や二人は確實に居るだろ?」
「事は分かりきつていたことだし」

でなければあの程度の輩が封魔結界なんて代物、入手、設置などとでもできる様なものでない。

「なにせ狙っていたのはフィーリカのヤツだ。単なる人攫い程度に考える方が愚かしい。最も連中ら、あの小悪党どもとの縁が深かつたからといって黒幕と決め付けるのもまた早計なんだろうけどな」

本当に面倒臭い。

これだから陰謀事は…。

その貴族連中すら捨て駒と出来るものの可能性もある。

力とは、なにも表立つたソレが全てではないのだから。

「なるほど、ソレは確かに… そうでしょうね」

似たような結論に到っていたのか、エスアリアもまた真剣な空気を纏いつつ頷きを返してくる。

「とにかく今回の犠牲者連中に関しては俺的にはどうでもいい。死人に口無し、流石に死んでまでちよっかいを出して来る様な事は無いだろうしな」

「そりはいきません。彼らの関係性について裏を取り、その上で彼らの組織としての根底にまで調査を進めていかねば…少なくともこれ以上狙われないという保障は持ちたいですから」

気楽な言い方をして見せた俺に対して真面目過ぎる回答のエスア

リア。

まあたしかに言われてみればそつかとこうふを持ち。

ただひたすらに向かい来る者たちを蹴散らしていたため思い至らなかつた視点だった。

「まあたしかにな。普段そこまでは深追いしてなかつたから付かなかつたぜ」

ばれたら即逃走。

俺的には基本がソレだったからな。

その辺りが放浪者と定住者の感覚的違いと言つた所かも。

しかし…

「とは言え、完全に潰しきるのは不可能だぞ」

どれほど叫く正確に対処しようと一度洩れた情報を完全に消し去る事は難しい。

情報とはどこのからでもどんな形ででも必ず流れ出してしまう。

「…まあやうでしょ、うね」

そういうたり前のように返答を返してくれている辺りエスアリア自身もまた理解の範疇内の事が故にだらう。

「しかしそれでも…」

「や、やうやくは全然マシって考え方」

「ええ、あの子はまだ秘密を持つには幼すぎますから」

だから守つてやらなければならぬ。

言外にそう言われた気がした。

そしてその感はまた正しいのだから。

自分もまたそれを感じていたのだから。

「つと…話が脇に反れちまつたな」

何氣に湧き上がってきたしんみりとした空氣をかき回すように少し大袈裟に話題修正。

正直いつこの空氣は苦手だ。

「とにかく話を戻すぞ。とりあえず客観的な見解は判つた。でだ、そこから何故魔王に行き着いた、話を聞く限りじゃどう見ても繫がりが見えてこないのだが」

多少強引だが一気に話を戻す。

そこまでしなければ拭い切れないソレの様な気がしたから。

「ええそうですね、確かにその通りです。捜査の方も通り魔的犯行

から政権への叛旗にまで、いまだ事に置いての狙こすり特定でき
ずに居る状況ですか？」

感じた疑問そのままの口トバに返ってきたのはあつけ無いほどあ
つむつとした肯定の言葉。

「なつ…ちょっとマテなら魔王の奴がビリからソレが出てきた
て言つんだよ」

実はまだ何も判つてませんといつ感じの答へに、あまつに予想外
過ぎて若干慌てる。

「それはとある方からの助言で」

「とある…方?」

そして濁される様に、ボソリと零された第三者的存在。

なにやら少しきな臭さを感じ…

「ええ何故あの方があ知りになられていたのかは判つませ…」

「……」

「ん…?」

「つ…?」

その叫びは唐突だった。

第1-2話・唐突過ぎる遭遇

「時は少しさかのぼる」

私は今供の一人も付けずたつた一人でこの見知らぬ街を歩いている。

それはアルスト王国第一皇女リリス・アルスト・テスターニアとしては立場的にも余り褒められる事ではない。

軽率と見られる行為。

まあ最も私を如何こう出来る存在がそいつ居るとは思えないが。とは言えソレを知らない周囲の者たちには心配かけるのは判つてはいる。

取り合えず書置きは残してきたけど結局の所無断で抜け出してきたのには変わらないし。

仕方ないとは言えもう少しやり様があつたのではと、今更ながら思つてしまつ。

とは言え、流石に事この件に関しては他の誰にも知られる訳にはいかない。

「この国の者達にしろ自國の者達にしろ。

本来なら……彼女に話を持ちかけてもアイツの事までは話すべきではなかつたのだと思つ。

しかし気付けば話題をすこし済ませない状況と流れに運ばれていた。

(やつはまあ流石としか良い様がないのよね)

本当にしてやられたと感じつ感じ。

流石はあのサークル魔法学院のトップだった女性。

上に立つ者としての格の違いを感じさせられた一幕だつた。

しかしあれから一年よくへん握るだ手掛かりに通じそつな道。
逃したくな。

取りこぼす訳にはいかない。

それに……ソレイフィアス家なら少しひらげても良ことも思つ。
ソレぐらいは信じても良いと思つ。

会話は少しだが、その第一印象は少なくとも彼女なり世論に田を疊りす」とは無いと思えたから。

「あんなにせよ、まずはフイーリカところの事かな」

件の事件の当事者にして唯一確定している生き残り。

つい先程、目が覚めたとの連絡を内密に受け取った。

聞きたい事は大局的にはただ一つ。

「今回の件、間違い無くアイツが…ジー・ニアスが関わってる」

ソレは私にしてみれば疑う余地すらも無い確信的な思考。

あんなふざけた魔法式、アイツ以外に構築できるとは思えない。認めるのは非常に不愉快で不本意だけど、その能力だけは認めざる得ないのだから。

そんな思考を延々と続けながらやがて目的地、リィフィアス家に戸を叩き、現れた十代中じろ辺りである少女、彼女の娘であるカナリアに招き入れられる事で屋敷へと踏み入れる。

「カナちゃん、お客様誰が来たのー」

間もなくしてひょっこりと顔を出して覗き見てきた女の子が一人。

見た目的には十歳前後だろうか？

ただその仕草、印象的にはもつと幼い感じに見える。

「あつフィ…フィーリカ、先生にお客様みたいですから少しあとなしくして下さいね」

「ハイ

印象通りな素直な返事。

「のくらこの年頃の子ってそんな仕草ひとつひとつも可愛らしい。

と、まあソレはさておき。

「ちよつと行かないで、待つてください」

首を引っ込め、おそらく奥の皿屋へと戻つてこいつとじつこるであつたその少女、フイーリカちゃんを慌てて呼び止める。

「どうしましたか？」

余りに唐突な行動の為か、少し驚いた様子なカナリア。

フイーリカちゃんもまたその場に足を止め「なに？」と声を感じに小首を傾げている。

「あの…貴女がフイーリカさんですか？」

「うん、そうだよ」

一応念の為にと問い合わせにあつたりと答えてくれるフイーリカちゃん。

カナリアがその明け透けな態度に「フイーリカさん言葉遣い…」とちよつと慌てるみたいだけど今はまあどうでも良い。

「えっと…ホントに?」

「うん、どうしたの?」

間違になさそうだ。

なんとか…「口まであつたと別人に会えてしまつて正直あ
つけなれ過れて肩透かし感が否めない。

と言つた普通過ぎて件の事件に巻き込まれた挙句三日も眠り続け
ていた少女にはとても見えない。

「えつと……実は貴女にも少しお話を聞きたい」とがありまして…
出来れば「口」と一緒に居て欲しいのですが、よろしくでしょうか?」

「…私?」

「ええフイーリカ・テスタークさん、貴女ですか」

キコトンと首を傾げているフイーリカちゃんに改めて念を押すよ
うに言葉を補強する。

「うん、こよー」

「ちよつ…フイーリちゃんお客様に失礼でしょ」

「まあまあ私は気にしませんし、変に罪まつますよつ私も話が楽で
すから」

そして変わらぬ調子のままに顎け寄つていよいよつあるフイーリカ

ちやんを待つ。

流石にそりそろ堪えられなくなつた感のカナリアを苦笑交じりに宥めつつ。

「…ひー!?」

変化は唐突。

あと数歩という距離まで駆け寄つてきていたフィーリカちゃんが唐突に足を止めたのが始まり。

いきなりの事にカナリア共々僅かな驚きを感じつつフィーリカちゃんを見てみる。

その瞳は信じられないものを見たかのよつて見開かれ。

更には今にも零れ落ちそうなほどに瞳を涙で潤ませている。

口は微かに、なにか言葉を口に出さうとしているのみの感じ。

「えつと…じうしたのでしょうか？」

「フィ…フィーちゃん？」

あまりに唐突過ぎる変わり様に駆け寄ることも思いつかない。

「カナリア嬢?」

なんとなく助けを求めてくてカナリアに視線を向けてみたら、力

ナリアからも私に向けて縋られる様な視線が…。

そして…

その一瞬…

一人の視線がお互いに向けられ、フイーリカちゃんから外されたまさにその時。

その一瞬の空白。

その瞬間。

「おかあちゃん…！」

「えつわきや…………！」

反応出来ぬままに視界外からの衝撃。

いきなりなことにそのまま押し倒される。

カナリアが口を両手で押さえ、驚きに目を見開いている姿が流れる視界に沿つてすぐに外れる。

そしてその衝撃を『えてきた存在。

一瞬にして距離をゼロに…

突っ込んできた件の少女、フイーリカちゃんはといつと…

「おかあねえー・おかあねえー・おかあねえー」――余ったかつたよ寂しかつたねいわ――「おかあねーーん」

私の胸のうちに縋り抱きつき物凄い勢いで叫んでいた。

「なつなつちよひかよひと待つて、フィーリカつぢやん！ かつカナ
リアーーー！」

双方共にソレは既に叫び。

ハツキリいつて訳判んない。

何が何なのか信じられない。

ホント何なのよこの状況

といふたお母ひにてなは

和二ノ丸金

卷之三

ホントホント何でせんじから謙でせんじから

「たすけて――」

「えっと……」

ホントコレビリコツ状況なのだらうか?

例の叫び声、らしき声がどうしても気になつて、Hスアリアを追つて口まで来たのは良いんだけど……。

「えっと……どうしましょ、ひー。」

あまりの急展開に自分でも類が引きつっているのが判つてしまつ。

助けを求める気持ちで隣を見上げれば相変わらずの鉄面皮な表情。

口までの状況で最早流石としか言い様がない。

「なんとこつか……なんでアイツが……」

思わず出でしまう一言。

視線の先にはフリーに突撃食らつたのであらう押し倒され、手加減無しにじやれ付かれている見覚えあり過ぎな女。

リリス・アルスト・テスターニア。

「…やはりお知り合いで？」

聞き漏らす事の無いエスアリアの問い合わせ。

ソレはアイツがこの場にいる理由を知つていぬつての感じ。

「ああ…つて事は今回の…」

「はい、『想像の通りジー』アスの情報は彼女からです。何でも魔法式に見覚えがあつたとか」

エスアリアの言葉内に疑問ではなく確認の意を感じ、そこを付いてみればまさしく思つていたままの答えが。

「あ～あれか～」

その言葉内の理由に思わず納得。

確かにあの魔法式は…知つてゐるヤツが見れば一目瞭然だつただらう。

「んでも何でアイツがココに？..」

王族であるとは聞いた事があつたがそれでもこの国ではなかつたはずだ。

ああそれは間違ひ無い。

「戦後における協定条約の使者として一ヶ月ほど前から滞在されておりましたが」

律儀にも俺の疑問に答えてくれたエスアリアの答えを耳に通しながらももつ一つの繋がりに気付か思へ至つてもいた。

セツフイーは自分の母親を捜しに飛び出しあきたのだ。

「の広い世界。

数多にある大小多くの町、集落の中で「」だ。

その理由。

その答えは。

(つたく、確かに会わせてやれうとした心当たりが、まさかダンピシヤだつたとはな)

答えは「」まで聞こへるフイーの言葉にて一目瞭然。

つまる所そういう事。

本能的か、同族ゆえの感應か、はたまた親と子としての縁か。

「」の地に居るところの事を察していたところの事なのだ。

「ところで貴女は彼女…アルスト王國の第一皇女どういったお知り合いで?」

問われた疑問は、まあ確かに気になるであろう筈のソレ。

世界中でもダントンの悪名高きを持つ『魔王』と大国の姫君の繫がりだ。

場合によって、ただそれだけで世界中を揺るがしかねない大スキンダルになつる。

「アルスト王国…ああそつだその国だったなアイツの故国」

とは言えそつちに關しては俺としてはまだどうでも良い。

権力だ何だと、そんな事は執政者だけが気にしてれば良い。

俺には関係無い。

問題はもう一つの方。

多分だがアイツ自身も隠しているのであるつもうひとつ立場の方。

あの大戦を終結へと導いたとされている英雄の一人。

ハ英雄『神炎天舞』としてのアイツ自身。

「ところでアイツ自身についてはそれ以外になにか聞いているか?」

「いいえ、彼女自身については何も聞いては居ませんし語られてもいません」

「そっか……なるほど、なら今はまだ言えないな。関係もだがアイツ自身の立場もな……その辺察してくれると助かる」

別に底うつもつは無い。

面倒事は避けられるなら避けるべきだからだ。

ただ……まあ……

「それでアイツがココにいる理由は?」

話からじてジーニアス関連。

決してフリーに会いにこう事は無いだろ?

「情報の交換条件でしたから。事件の手掛かりを教える代わり、この事件唯一の生存者フリー・リカとの面会を望まれましたので」

「ああなるほど、つまり……」

俺との関係を聞きに来たとこう訳か。

動機に思ひ当たる点が無い訳ではない。

最終的に求めているのはアイツの……アヤの行方だろ?

そしてその手掛かりとしての俺とこう事が。

「……ではそりそりの騒動を收めませんとね」

ある程度の納得は得られた。

そんな俺の内情を察したのかエスアリアが静かに再び階下へと足を進めだす。

そして……

「あなた達、こんな所で一体何時まで何をしていいのですか?」

…そんなたつた一言で全てが凍りついた。

正面立って向けられたあいつ等だけではなく後ろから追いかけ出していた俺をも含めて。

一瞬にして場の全てを威圧してを見せたあの威圧感。

正面に絶対零度の視線というヤツか。

多分今のエスアリアの前では石化の魔神メデューサすら裸足で逃げ出したであろうな。

第1-3話・明かされた秘密（前書き）

ジーニアスの過去のドタバタ。
その欠片かな？

第1-3話・明かされた秘密

そうして一瞬にして収められた騒動の後。

応接間にてお茶を出されるまでになつた。

その向には俺自身もまた含まれている。

正直残るか去るか、一瞬迷つたのは事実。

リリスの目的はあくまでフイーのヤツだし、俺自身アイツとは相性最悪だとは常々思つていいことだ。

だがフイーだけだと何を言い出すか正直怖い気持ちも大きい。

で、結局の所その一瞬の迷いによつて逃げ出す機を逃し、今こつなつてしまつた訳である。

「そつつまりこの子はある時のフニックスの子といつ訳なのね。しかし魂の移行に肉体の譲渡なんて…そんな事まで出来るだなんて」

事件のあらましから俺とフイーの状況についてまで、一通りの説明を終えたところでの感嘆めいた一言。

言葉と共にリリスの視線が隣でずっと自身にくつ付いていたフイーに向けられる。

当の視線を向けられたフリーはだが、自分が褒められたと思ったのか、それとも単に自分を見てもらえたのが嬉しかったのか嬉しそうな笑みのままべつたりとリリスに抱き付きます。

無論ジー二ニアスの存在はできうる限り誤魔化したし、そこに生じる矛盾もつまく辻褄合わせも出来たと思つ。

俺自身の名はジルコニアで押し通した。

本当ならジー二ニアスの存在そのものを無いものとして語りたくはあつたが、流石にフリーを抱えつつチンピラどもから逃げている所を見たという証言を複数用意されていてはそつもいかなかつた。

行動は共にしていたが事件後の行方までは判らないと言つてはおいたが…

さてはでどここまで通用するものか。

最後にジー二ニアスとジルコニアの関係も聞かれるかもとは思つたのだが、何故だかソレに関してはは一言の言及も無かつた。

ただなんというか…ジルコニアの名を名乗つただけでなにか納得氣な表情をそれでいたのが俺的に若干気になつてはいる所なのだけど。

「フィアリスは何もおっしゃりはしていませんのですか？」

心底驚いている感じのリリスに未だ一向に姿を表さうとしない当事者の名を上げてみせる。

それがもう一人の……俺が以前から知っていたフューネックス。

田の前に座る」のリリスと契約せし者。

そしてほほ間違いなくフイーリカの捜し求めていた母であろう存在である。

「フイアリスなら朝からずっと寝ています。声をかけても起きてくれそうな様子ではなさそうとして」

少し困った様な表情。

ちなみに今、昼時と言つには少し早いがそれでも十分と田の高い時間帯である。

とは言え知つてゐる者からすればコレほどまでに説得力のある理由もない。

フイアリスというフュニックスはそういうヤツなのだ。

フイアリスの名を出した事にいぶかしむ様子は……やはり無い。

おやらくはジー二アス経由で知つていていたと思われてゐるのだらう。

「しかし……本当にジー二アスと連絡は？」

「はい、突然の事でしたので後のことばにも……それに今わたくしはこの様な姿ですし、どうしたら良いものか……」

リリスの言葉内に含まれた合流手段についての問い合わせもそつと

顔を伏せる様にして避ける。

「コレまでもこうした騒動が無かつた訳では…むしろ頻繁でしたが…その殆どは全てジー＝アスに頼り切っていましたもので」

緊急だったからといつ言い訳は俺の事がある程度以上知る者に対してはまず通じない。

基本俺とトラブルはセットで付いて回るところのが周囲の認識である事は俺自身をも気付いている事だからだ。

本当に嫌過ぎる評価だが、否定できない所が更に救い無い。

「そうですか…それは確かに何と言いますか…相変わらずなのですね」

「ええ相変わらずなのです」

本当にどうしようもなく悲しいがな。

「ところで同行者はジー＝アス一人だったのですか?」

「えつ?」

「他に同行されていた方は?目撃証言もジー＝アスとフィーリカ嬢のソレしか取れませんでしたから。ジルコーニア様の事も初耳でしたし…ですので他に誰か居りませんでしたでしょうか?」

僅かに…

それでも確実にリリスの声と瞳に力が込められたことが判った。

「例えは……そう、例えは他に女性の方でとか……」

明確な名は出されない。

だが「ユーリ」がおそらくリリスの一一番聞きたいであります本命の問い合わせ。

求めているのは間違いなくアイツの事。

「いいえ他の同行者は誰も居りません…フィーリカともこの町ですしそれまでもずっと一人だけでの旅路でございましたので」

「えつ…貴女のお姉様とも一緒になかつたのですか?」

「私の…姉?ですか?貴女のではなくて?」

しかし出でてきたのは想像したソレとは違う名で…

「ええ、ジルニア様が居るのでしたのでアスタチア様もまた一緒に思つておりましたけど…もしやあの大戦の際に…」

「ちよちよちよつと待つ…てください、何故「ココでその名前が出てぐるのです?」

言葉使いが一瞬素に戻りかけて内心バクバクしつつも、いきなり出てきた予想外の名前に慌てて待つたをかける。

確かにジルニア…というのはアイツの妹から持ってきた名前だが

だからといってただのいち従者を何故こいつが？

「えつ……何故と言われても……夫婦でしたら一緒に居るのは当たり前でしょう？」

「キョトン…と、さも当たり前の事とばかりに斜め上の発言をかましてくれるリリス。

「ちよつちよつちよぢよぢよぢよぢと待つて…何夫婦って何言つてゐの、といつか何ソレ初耳なんだけど」

唐突過ぎる爆弾発言に自分軽くテンパリ中。

「えつお知りでなかつたですか？お一人の婚約はジーニアス以外全員が知つていた事と思つておりますが」

だからその発言もなんかおかしいでしようオイッ。

思いつ切りツッコミたいが驚き過ぎて言葉が出ない。

「特にテルルとローレンシムがノリノリで。嬉々として他の主要貴族の反対を潰して回つてましたのですが…アスタチア様からは何も？」

さらにポロポロ普通に出でぐるとんでもレベルのビックネーム。

テルルは相変わらずとしてもローレンシムつてお前つ正真正銘グラステロア帝国最高幹部である六将のくせに眞面目に戦争してたと違つのかつ！

「だからなんで？……？」

あまりの衝撃に、それでも何とか搾り出した万感の思いを込めまくった言葉。

「まあテルルは単純に面白そうだったからでしょうね」

「いや、それは判る。が、なんでローレンシウムまで……？」

「そうですね……一言で言つてしまえば戦力確保と言つた感じの思惑だつたのではないでしょ？ジーニアスという力を完全な形で帝国側で確保したかったと考えていたのだと思いますよ。テルルのお気に入りだつたからとは言つても所詮ジーニアス自身は別に帝国に忠誠を誓つていた訳でも雇われていたりしてた訳ではなかつたのですし」

「それは……確かにそうだつたけど……」

「アスター様と婚姻を結ばせる事で皇族の末席に据えてしまえば確実に繋ぎ止めておけると考えていたのではないでしょ？」

「だからって何でアイツとの結婚が……つて、ちょっとマテ今なんて言った？」

自分の知らぬ所で進んでいたと思われる謀……と言つか悪ふざけ（？）に困惑と頭痛の渦中に放り込まれてはいたが、流石にその一言にはなんとか反応できた。

と言つか危うく流しかそこになつたその言葉を慌てて手繰り寄せる。

「ちゅうと…チョットマッテク、ダサイリースさご」

「…なんでしょうか？」

「皇族の末席つてなに? なんでそつなる?」

それは…ソレは本当に洒落にならない言葉。

と言つた話の繋がりといふか関係が全く見えない。

しかしそう思ひのは俺だけの様子。

リリスの方はリリスの方で僅かな困惑顔で俺の言葉を受け取つて
いる。

「なんでつて…そんなの当たり前ではないですか。低位とは言え彼
女も…」

そして彼女にとつて当たり前であらうその根拠を語りかけて…

「…貴女何者ですか。少なくとも私の知つてゐるジルコニア姫で
は無いようですが」

何かに気付いたか本氣の警戒色をもつて視線を飛ばしていく。

「なつ…なにを突然」

「何が狙いですか。その名を…低位とは言え田グラステロア帝国皇
族の名を語り何を企んでいるのですか」

「はあっ！？なあ？皇族つジルコニアが？ってつともしかしてアス
タチアもっ」

普通に初耳なんですけど。

「もしかしなくともその通りに決まっているではありませんか。テ
ルルの従兄弟であり第6位と7位に位置していた正當な王位継承者
です。まさかジーニアスを利用してまた何か謀でも…」

「マテマテマテマテ待ってくださいリリスサマ。ソレ何本当に初耳
なんすけど」

物凄い勢いで暴走と言つたが、オレ的に非常にヤバイ方向に思考が
ぶつ飛びそくなっているのを慌てて止めにかかる。

「なにを今更つ！当人なら知らない方がおかしい事つ今更どひ言つ
逃れする氣ですかつ」

「落ち着け落ち着いてホント落ち着いて聞イテッテバホントにチョ
シト。そもそも偽者演じるならむしろ知つてるだろーがつ。てかホ
ント初耳なんだつて」

思い振り返つてみてもそんな言葉聞いた事が無い。

決して短くない期間接していてそんな仕草を垣間見た事すらない。

「と云うか普通に洗濯してたぞ掃除とか料理とか、つーか皇族？従
者じゃなかつたのか」

アイツに対する印象と言えば…

「キバキと走り回つてあれやこれや身の回りのことをしてくれている姿。

「貴族なんて一体何を考えているのか理解できませんよね~」なんて他の富仕えの者たちと楽しそうに話している姿。

それがあまりに普通過ぎて、いきなりそんなコト言われても微塵も想像できない。

「そんな訳無いじゃないですかーあと家事全般は彼女の趣味ですっー」

「…………」

「…………」

「…………」

「…………本当に何者ですか貴女は…偽者、騙つにしては確かにあまりに彼女の事を知らな過ぎる。かと言つて偶然と言つてはその名はある意味特殊なものであるそのなのですよ」

テンションを上げるだけ上げでの睨み合いの末、ようやく勢いも治まつたか、盛大なため息交じりの言葉が吐かれる。

「そんなコトお…私が知りたいぐらいですよ」

そんなリリスに合わせるようにして俺もまた盛大に肩を落とす。

本当に何なんだよあの国...と血つかテルルの血筋は。

「.....正直に答えてください」

数度の呼吸の末、完全に落ち着きを取り戻したリリスが真剣な眼差しで「ひかりを射抜いてくる。

「その名...ジルニアといつねんが、貴女の本当の名ではありますね」

「.....」

「.....ええ、確かにその通りです」

流石に「止まで言われて本名と言いつ切る口とは...出来ない。

それだけのモノをその視線は孕んでいた。

「では貴女の本当の名は? 一体どこのどひかり様なのですか?」

言葉は続く。

「止は反りせられない。

本当に止は.....流石に口イツ相手でも言えない、言いたくない。

立場的にもそうだが、何よりもこんな状況に陥っている事を知人

知り合いに知られるのは嫌過ぎる。

シリアルスなとか場の空氣とかそんなもの以上に恥ずかしすぎる。

「……」

「……」

かと言つて下手な偽名は見抜かれかねない。

根拠は無いが向けられる視線の強さにそう思わせるだけの何かが確かにある。

エスアリアやカナリアに動きは感じられない。

静観しているのか話についてこれていないのか。

援護は……流石に無茶な願いだよな。

「……」

「……どうしましたか？」

「あ……その……わっ私は……」

ヤバイヤバイ本当に何も思いつかない。

どうあるつどうすればいい。

「……その……」

「ふう……いいです、質問を変えましょ。その名、ジルコニアといふ名は誰に……いや、ジーニアスが用意したものですね」

確信の込められた問い。

「……はい」

頷くしか出来ない。

根拠は……まさに今先程までの会話でだらり。

「つまりジーニアスと行動を共にしていた。それも短期的な期間ではなく長期的な時間を」

「…………」

バレるか。

否、まだ話し振りは別人と別けてのそれ。

「とは言え帝国関係者ではない。そりであるならジーニアスの名にすぐさま気付くはず」

「…………」

「貴女は彼といつから行動と共に？」

「…………」

「どういった関係なのですか？」

「……」

「あくは聞きません。無理にも聞くことは思いません。貴女が話しても良いと思える事だけでもかまいませんから」

「……」

「やつと見つけた糸口なのです……姉さまに繋がるかも知れない……」

「……」

「だから……」

僅かに洩れ聞こえたリリスの本音。

判つてはいたが、やつぱりロイッシュアヤを捜して……

「お願いします……」

第14話・探し人

真剣に…

自身の思いを全て押し込め…

頭を下げるその姿。

「コイツの素の一面向を知る者からしてみれば少々イメージからずれるその姿。

しかし確かにコイツの本質ともいえる一途さでもある。

そしてそこまで思われている者。

そうその姿がどうしようもないくらいコアイツの事を考えさせる。

アヤ。

コイツが…そして俺もがこの2年ずっと探し続けていた女。

俺とはまた対極に位置する伝説。

世界を救つたとされる8人の英雄の一人にしてその要であったと言われている女性。

ハ英雄『聖母』アヤ。

世間一般には最終決戦の地にて死亡したとされている。

しかしそんな事、アイツを知る者からしてみれば信じられるはずが無い。

通説や逸話とは違つた形だったが確かにあの時アイツの状況からその生存はありえないと断言してもいい様なソレ。

だが死体を見た訳じゃない。

最後の瞬間にした訳でもない。

ただそれ以降姿を表さなくなつた、ただそれだけ。

しかしそれだけでも俺たちにしてみれば十分すぎるほどの理由。

奇跡でもなければ…

間違いなくそういう状況だったが、現実としての死が目の前になければそれだけで良い。

奇跡が起きない限り…

そう言える状況なら俺たちにしてみれば生存は十分過ぎるほどの可能性。

何せアイツはその奇跡を起すヤツだったのだから。

それも頻繁に。

俺はそう考えて。

そして田の前の「イツもまた同じ考えだったのだろう。

先程の漏れ出した本音が…

今この姿、行動が…

その事を明確に表している。

しかし…

「…すみません…あの…その貴女の探し人の事はジーニアスもまた
捜していましたが…」

言葉に反応してか、顔を上げたリリスに向けてゆっくりと首を横
に振る。

そしてソレは紛れも無い事実。

天下一の放浪娘、テルルとの付き合いで探し人に関する手段と
能力は世界中の何者にも負けぬと確信できている俺だがその行方は
手掛かりす

らも見つけられていないのだから。

「……………そう…ですか…」

「……………」

「……………」

「…………

僅かにだが落胆に沈んだ声。

リリスもまたその件に関しての俺の能力の高さを知っているだけに期待も大きかったのだろう。

もしかしたら……と。

ただまあそこに絶望や諦めの感情が見えてこないはある意味流石だと思うがな。

「それで……結局の所貴女は何者なのですか？」

氣を取り成す為か軽く呼氣を整えてから再びまっすぐな視線。

(ちつ 誤魔化せなかつたか)

再び戻ってきた問いに内心舌打ちをする。

本命の話題を一足飛びで答える事でその問答を素つ飛びしたかつたのだが……

そうつまくいかなかつた様子。

「ここまで来てしまつと向か……本当に向でも良いから答へなければ
とこう空氣に……

「えつ……と……その……私の記憶が……イエス!!マセン違いますか

」

ひとつに出てきたのは昔アヤが使った言い訳。

なのだがあまりの嘘っぽさとバカらしさから瞬時に取り消し否定の言葉を吐いた。

こんな普通信じる方が馬鹿だ。

実際当時そんな言い訳を信じた様なやつは誰一人としていなかつた。

無論田の前のリリスも当然その内の一人だと訳だしじ。

信じるはずが…

「まさか…すっすみません随分と不躾な事を何度も…」

信じ…

「知らぬ事だったとは言えまことに申し訳ありませんでした」

信：じちやつてるよ、何故か。

状況的には非常に都合の良い事なのがあまりの事に思考がつまく着いて行ってくれない。

「しかしそうするどジー＝アスが名を用意した理由も…」

「いや…でもそれでも自分の知人の名前をそのまま使うところのも

…

「もしかして……いや、そんな事……でもそつ考えるところ……」

「うしてそんな俺を置いてリリスは一人ブツブツとなにやら思考を言葉に漏らしており……」

「あのっ……貴女本当に記憶を？ 本当の名前も何も覚えて……いないのですか？」

ズズイツと身を乗り出してくるリリスに遠きながら、勢いに压されるままに「クククと頷いてしまっている自分。

「なるほど……そつ考えれば全てが……でもそんな……いや、考えられない事でも……となるとアスタチアは……」

とうとう一人思考の底にドップリと浸かってしまっているリリス。

どうにかならないかと助けを求めるように隣に視線を向ければ困った様な溜息を吐くエスアリアとその膝で気持ち良さそうに寝息を立てているカナリアの姿。

「貴女は……まあ今回の場合主にリリス様の方かもしけませんが、もう少し発言に気を付けるべきですよ」

そんな俺の視線に気付いてか、小声でそつと忠告の言葉。

「隣で聞いてまして内心どれ程に驚かされ冷や汗をかかされた事が。幸い早々にカナリアを眠りの裡に鎮めましたので良かったですが」

続けられたそんな小言を聞きつつ思ひ返してみれば……

軽く青褪めるくらいにヤバイ内容でしたホントマジで。

普通に事情を知らない第三者に聞かれてたら速攻反乱者、と言つ
か帝国残党の裏切り者…内通者と捕らえられても文句の言えない言
葉の数々だ。

「まあその辺りの詳しい事はあとでゆっくりと聞かせていただきま
すから。よろしくですね」

「…はい」

拒否権は普通に見当たらなかった。

「貴女も随分と辛い道を歩まれてきた様ですね」

そんな所、唐突にかけられた神妙な語り声。

向けられたその言葉に意識を再びリリストの方へと向ける。

ようやく思考の迷路から抜け出してこれた感じのリリスト。

その表情は少し寂しげな様子で穏やかで優しげな言葉を紡いでく
れる。

リリストの中でどんな結論に達したのかはいまいち判りかねる所が
あるが、まあ悪い事態にはならなかつた様子で一先ずの安堵と言つ
た感じか。

「えっと……その…すみません」

とは言つたもののリリスがどういった結論に達したのか判らない以上どう答えて良いものか判断に迷うのも事実。

「クスッ 何を謝つているのですか、 そんな必要など無いですのに。 むしろ謝らばならないのは私の方なのですしね」

わずかに肩の力を抜いてリリスが「すみませんでした」と頭を下げる。

「知らなかつたとは言え随分と無遠慮にジルコニア様の心の内にまで足を踏み入れてしまいまして… どうにも私自身知らぬ内に随分と焦つていたようです」

「まだまだ未熟みたいですね」と自嘲気味の笑み。

「しかし… ジー一アスにも拘めないとなると…」の先どうしたものか

そしてそのままの雰囲気にての思案の言葉。

よく知らぬ者から見れば軽い啖き程度の言葉。

しかし俺から見ればその内情の憤りを抑えきれずにいるのは一目瞭然。

そしてその理由も… また同じく。

ジー一アスに無理だった事を果たして自分に成せるのだろうか。

そんな思いに駆られているのだな。」

リリスもまた正真正銘のハ英雄の一だ、互いの能力と実力の正確な見極めは当たり前の様にできる。

故に「その判断であろう。」

事実、探し人に関しては俺どころかテルルやアヤにすらある。

まあ戦いにはまったく関係の無い技能の上に特性や性格の関係上仕方ない事ではあるがな。

とは言え…

「どうするも何もその為に国に帰られたのではないですか」

…それはあくまでリリス個人の技能の問題。

「彼女を捜す為の手と曰は多いに超した事はありませんものね」

ただ個人としてではない、一国というバックを持つ王族としての力はまた別物なのだから。

少なくともこの家出娘が実家に帰っている理由などそれ以外に俺には思い浮かばなかつた。

「そりではありますか？リリス・アルスト・テスター・ア様」

「ええ… そうですね、その通りでした。ハハッ本当に何を言つていいのか、あんなバカに頼ろうだなんて。私に出来る事で、私にしか

出来ない方法で姉さまを見つけ出したが逆にコマイツらしき。

一部不穏な言葉は混じっていたがソレが逆にコマイツらしき。

その仕草や表情はともかくな。

「本当にこの度は突然の申し出と訪問、すべての我慢を聞いていただきありがとうございました」

その後しばしの談笑ののち、穏やかな笑みと共にリリスが頭を下げる。

「いかがいたしま随分と面白にお話を聞かせていただきましたし、けつして無益な時ではありますんでしたよ」

「おかあさん帰っちゃうの？」

穏やかに応じるエスアリアに寂しそうなフイー。

「うーんね、私も黙つて抜け出してきてるからあんまり長く時間は無理なのよ」

「うーもつと一緒に居たい」

「ハハ、あんまり無理を言つむのじゃありませんよ」

「本当にゴメンね、ファーリスが起きたれば彼女だけでも残していくのだけど」

本心から申し訳ないといった感じのフリスの言葉。

フィアリスのヤツは結局最後まで起き出して来なかつた。

なんとこ'うかとにかくまでりし過あらわ。

とは言え、確かにコレで終わることはフィーのことを使いつとあまりに寂しげか。

「あの……」

だから少しく手を上げ言葉を挟む。

「流石にずつととこ'う訳にはいかないでじょ'うか? カビضميرへフィーの事預かってもらえないでじょ'うか?」

「えつ」

「ジージ~」

「私とフィーの関係も変則的ではありますかが契約状態にあります。ですからずつととこ'う訳にはいかないでじょ'うか? それでもこの国に滞在されている間、ぐらこはダメでじょ'うか?」

「……つー・ジージ良いの?」

「いや、ココスがしようとした事は俺たちの方でも可能なのだ。

時間や距離の制約はあるものの46時中共にしなければならないと云つ事は無いであらわ。

確かに契約直後である以上、不安定さはあるだらうが数時間程度なら大丈夫と思う。

仮に俺の見通しが甘かったとしてもその辺に精通しているであろうリリスとファイアリストがフリーと共にいれば最悪の事態にだけはなるまい。

「もつともこちらの我慢ですのでは無理にとは言えませんが」

「それは……大丈夫です問題ありません。けど…フリーちゃんは良いの？」

「うんっ おかあさんといたい」

「…ふう、まつたくとんだ無理を…すみませんテスター二ア姫」

「いえっそんな頭を上げてくださいリィファイアス様。元はと言えば私がこの子の母親を連れ出してしまったのが原因みたいなものなのですし」

「ではお願ひします」

「はい任せました」

最後に俺とリリスが頭を下げあい、事は一応の決着。

「あつあとジルニア様、コレなのですがジーニアスに渡しておいて貰えないでしょうか。今後何時時間を取れるかわかりませんし」

最後、そう思い出したかのように取り出したのは一通の手紙。

「シス・カラミティ様からの最後の手紙です」

第1-5話・ペンフレンド

その名前を聞いた瞬間、身体が…心がビクンと反応した。

「あら、その様子だと聞かされていたみたいですね」

リリスがそんな俺の反応に気持ち悪さを下げた様な気がした。

「おそらくあの最後の時の少し前に綴られたものだと思います。スイ様が見つけられてジーニアスに預かっていたものなのですよ」

「シスの…」

せつと差し出された手紙を意識の外側で感じながらも、それでも自身の手は差し出された手紙を受け取っていた。

「そう…おそらくですけどね、あの最後の戦いの直前くらいじゃないでしょうか？机に残されていたのをスイ様が見つけられて…で、多分誰よりもすぐにかち合いつてしまつて私に渡されたの…まあちょっと入れ違いにはなっちゃいましたけどね」

軽く笑いながら「お願ひします」と手紙から手を離す。

「本當なら預けられた私が直接と言つのが筋なのですが…またそれ違つ可能性もあるでしあうし、なら確実に迎えに来てもらえるジルニア様にお願いした方がより早く確実にジーニアスの手に届けられるでしあうから」

続けられた言葉に込められた思いは俺から見ても判るぐらいの信

頼。

例えどんな状態であっても。

今こいつして…姿形を完全に別人のソレへと変えてしまっている現状であっても。

俺なら必ず見つけ、迎えに来ると…さつして見つけられなかつたり搜さないことはないであるうじ言つ確信。

例え本人にそういう意図の自覚がなくとも…なんとなくだけそんな風に聞こえた。

最も間接的にではあっても、田の前でそんな言葉をぶつけられるのは無茶苦茶に照れ臭いのだけど。

特に普段が普段のコイツからだと希少性も含めて更に屈心地が悪くなる。

「わっ…わかりました……です、ハイ」

そんな心地のせいか自分の顔が今どうなつているか知るのも見られるのも怖い…といふか恥ずかしい。

絶対にアマトモじゃない。

さつきからずっと無表情を装つとしているナビ、つまくなんて絶対出来ている筈が無い。

うんソレは確實。

何か賭けたつてかまわないくらいな確信が持てる。

本当にひじょーに遺憾ながら。

「クスクス…では改めてお願ひします、頼みましたよ」

そんなに今の俺が面白いのか、それとも他に何かあるのか。

ただ笑いを噛み殺すような感じのままその身を翻す。

そうして懐かしい悪友との再会は一端の終わりを見せた。

最もリリスは気付いていなかつただうづナビだな。

「こしても…」

(…シスからの手紙か)

手元に残された一通の手紙に自然と田元が緩む。

かつては何通も…ほとんど連日のように交わしあつた手紙のやり取り。

そしてもう一度と交わされる事のなくなつた手紙。

その最後の一通か…

(まつどうせ何時もの惚氣万歳の手紙なんだうづナビ)

まるで昨日の事のように溢れ出て来る当時の事を思い返しながら手にした手紙を見つめる。

「しかし本当に貴女は……いえ、ジーニアスとは随分と不可解な交友関係を持つていますのね」

そんな思い出に浸つている俺にエスアリアからの苦笑交じりの言葉。

「アルスト王国の姫君に加えさらには聖人ですか……そういえばジーニアスによつて襲撃誘拐された聖人の名が……」

「確かに世間一般の話じゃそうなつてるわな」

(毎度の事ながら事実からは激しくぶつ飛んでるが)

最早諦めの笑みと共にエスアリアの推察を肯定する。

そう、ジーニアスの関わる逸話の中でも比較的有名な話。

巡礼途中の聖人シスを攫い。

その心を邪悪に墮し、神より与えられしその特異なその能力を口が欲望のままに振るわせようと企むものの、後にハ英雄と呼ばれる事となる『聖母』と『神炎天舞』の二人によつて阻まれた。

と、世間一般には英雄譚の一節として語られたりしている。

まあ最も実際には……

襲撃されている現場に偶然居合わせた俺がほとんど成り行きに呑まれる形で襲撃者を蹴散らし、結果助ける形となつてしまつたんだが。

ただ、その時点では既に厄介な呪縛をかけられていた様子。

まあ助けたついでだしと思い、その解呪の為グラステアに一旦連れ帰つた訳だが。

…まあ一種の気紛れだな。

その後この行動を何度も…何十度も後悔する事となつたのだが。

ちなみに英雄二人はこの件には関わっていなかつたはずだ。

少なくとも俺は知らないし、もう片方の当事者だった当人たちにも聞いた事があるが話の出所はサッパリだつた。

まあとは言つてもそんな些細な事は今更気にするまでも無い。

何時もの事だし慣れたもんだ。

非常に嘆かわしいが。

それにその後の…解呪までのグラステアでの日々に起きた騒動に比べたら本当にさそやか過ぎるトラブルだつたのだから。

…あれは本当にキツかつた。

なんと言つ……思い返しただけでいまだ頭が痛くなつてくるぐら

い。

まさか内乱直前今までいくとは流石に予想も出来なかつたし。

恋に暴走した堅物の…なんとも凄まじかつた事か。

「まあなんと言つか…そのときの縁で色々とな。文通友達と言つか
そんな感じに落ち着いてたわけなんだよ」

元々が超が付くほど箱入り娘だったシスにヒト外の世界と言
うのはまさに憧憬的。

その上友好関係も閉鎖的な上神聖視されていたせいで壊滅的。

その結果、第一印象と言つか出会いのせいもあって思いつき懐
かれた。

とは言つてもお互いの立場もあって一緒になど居れないし出向く
訳にもいかなかつた。

「まあ文通程度のやり取りなら世間どじろか間者の類の目も誤魔化
すぐらいなんて事はなかつたしな」

何せ二ちらにはテルルがいるのだ。

かなり渋つてはいたがそれでも協力はしてくれたから。

「まあ大体一年と少しひらいの間だつたかな」

思い返してみればコレもなかなかに悪くない思い出だ。

切欠はともかくな。

そしてそれ故に最後と言つゝ言葉に寂しそと悲しみが込み上げられる。

「しかしその最後と言つのは……」

「まあそういう事だ。何と言つか……最後の戦の時にな」

その場には立つていられなかつたが話には聞いている。

暴走状態の異界の門を塞ぐ為の人身御供として世界樹に魂を同化させた。

世間一般では『聖母』が成したとされている偉業。

「まつなんにしてもそんな面白い話じゃねえわな」

当人の内心はともかく残されたものからしてみればあまり変わりが無い。

たとえどの様な『予言』があろうと今を生きるだけしかない俺たちにしてみれば栓無い事。

(まつ最もスイ達はそう考へなかつたみたいだけどな)

なんとなく思い返すはあの地に残つたあいつらの顔か。

「あとリリストの事が俺はまあ喋らないからな。知りたかつたらあいつからにしとけ」

話は終わりとばかりに俺もまた席を立つ。

俺自身のことは関しては恩も感じていろが、流石にコソヒンコレは別問題と言つ所だらうしな。

そして扉を出していく最後まで…背後からの言葉は無かった。

第1-5話・ペンフレンド（後書き）

ちなみに【恋に暴走した堅物】＝【聖人シス】ではなかつたりです。過去のダイジェストは「」まで、かなり飛ばし気味で説明不足120%でしょうがコレは後々の伏線と言つ事で流していただければ嬉しいかな……つと。

次回からようやく時計が動き出す……予定？

第1-6話・日常——朝の一時（前書き）

リアルが落ち着いてようやく復帰できました。
まあしばらくの間は執筆のリズムと調子を取り戻すまでの間入口
一ペースが続くとは思いますが暖かく見守つていかださると嬉しいです（ペコリ）。

「へへーじが……」

扉を抜け、まず出た言葉は感嘆のソレ。

「流石と書つべきか句と書つかかりしかりだけの場を用意できたもんだな」

ただ見るだけならなんて事無い……やや閑散とした雰囲気の中庭。

しかし魔法使いとしての視点から見ればまさに万能とも言える術式場。

どの属性に偏る事もなく、全てが均一に世界を覆っている。

普通ならじつはなり無い。

たとえそれが一流を名乗る魔法使いによるものだったとしても。

本来、何ものにおいても属性の向き不向きがあり、その効果も不動ではなる常に搖らぎの中にあるものなのだ。

どれ程意識的にそう仕向けてもそう簡単には覆せない法則。

故に通常は行使する属性に合わせて複数の場を用意するもの。

しかしこの場合は……

まさに絶妙と言えるバランスの「元安定した場。

その特性故にか、場の恩恵はほぼ無いに等しいが並程度以下の使
い手の練習場としてはむしろ最適であるとされ言えるかもしない。

リィフィアス家の中庭。

それがこの場所

カナリアの修練について来た訳なのだが。

これはなかなか。

ただ足を踏み入れられただけでもどれだけの価値があるか。

「ハラッダメでしょ。そんな乱暴な言葉遣いして」

そんな感動真っ只中の俺の田の前に、ペシコツと指が突きつけられる。

「「もんだな」なんてダメですよ。ジルちゃんは女の子なんですから、そんな男の子みたいな言葉遣いしちゃいけません」

「ほり言こ直して」とまで言われ、寸前までの感動が吹く瓦解していく。

完全にかき乱された空氣に、内心にて盛大な溜息。

「……用意できたものですね」

最早言ひ返す氣すら起ひせなかつた。

本来、敬語を使う事に抵抗は無い。

好き勝手やつていたとは言え、それなりに長い時を王家のお膝元で過ごしていたのだ。

」の程度いやでもすべに身に付く。

… そう敬語に関して抵抗は無い。

ただ… 同じような話し方言葉遣いでも、女性らしく話し方をと指摘されると。

途端、羞恥心に身を悶えさせたくなる。

さつきなんか鳥肌が立つたぞ。

まあそんな俺の内心など知る事も無いカナリアは満足そうにウンと頷いていて。

その上「よく出来ました」などと頭まで撫でて来る。

いつの間にかすっかり姉気取りだ。

抵抗は…

無理。

と言つた子供を泣かせたり困らせたりして喜ぶ趣味は無い。

「ではそこでおとなしく見ててくださいね」

そんな俺の態度に気を良くしたのか、見た感じかなり上機嫌な様子で場の中央に足を進めていく。

本当に嬉しそうに。

何と言つかるか年頃なのだろう。

まあ判らなくも無いが…

思い浮かべるはテルルに懐かれ始めた頃の自分自身か。

まさか自分が逆の立場になるとは欠片ほども思わなかつたが。

「またくなんつー人生だつてんだよ」

思わず洩れ出る苦笑。

何と言つた波乱万丈と言葉に物凄く親しみを受ける。

まあ何時もの事と言えばそのとおりで…

どうしようも否定できないのが涙を誘つ。

そうじつして鬱になつてゐる間にすっかり準備を整え終わつたのか、カナリアが周囲に魔力の流れを生み始める。

「ともかく、今日の所はどの程度をお手並み拝見させてもいいおつかな」

気持ち視線に力を込めて。

リィフィアス家当主の直弟子を見据える。

(あんまり期待し過ぎる訳にもいかんだらナビ)

どれ程の師がついてこようが初心の一歩は変わらない。

そして今朝の感じからしてカナリアの居る場所はまさしくその一步に違いないであろうだから。

(成長の度合には今後に期待、今は……資質の見極めかな)

魔力の流れの纏まりと指向性を田と肌で感じる。

魔法を使うに当たっての始めの一歩とも言える行使の基本。

なのだが…。

(あいつ等には全く不要で無意味な段階だったんだよなー)

なんとなくかつての情景が思い出される。

騒乱が続いていた世にあって。

その真っ只中に居たにもかかわらず。

それでもバカやつて騒いでいたあの時。

魔法の指南してやつてた一人の姿が…田の前で立つているカナリアに被る。

そう感じると…こういつのも悪くないかも。

なんて思つてしまつ。

堅苦しいのは嫌いだが、好き勝手して良いのなら教鞭を振るつの悪くはないかもしねり。

エスアリアの頼みとか狙いとかは関係なくとも。

何気に…掌の上で転がされている様な氣もするが、感じてしまえたものはどうしようもない。

(まあいいか、正直言つてこういつのもわるへないってのはホントだしな)

もう一度心の内で苦笑交じりの溜息。

あの時も…またあの時だつてほとんど成り行き一直線だつた様な氣もするし。

俺自身結構楽しんでたと思つ。

後悔なんて、指摘されるまで考え方として挙がる事すらなかつた。

例えソレが俺自身に向けられた牙となつたその時となつても。

「まつこのままエスアリアの思い通りにいつたのが少しばかり面白くないけどな」

なんとなしに思い返されるは今朝の一幕。

時はわずかに数時間ほど前のこと。

朝食後のお茶の席での事。

それは俺が田覚めてから数日の時が過ぎていた田の事だった。

立場？

気にするかそんなもん。

「といひでどひですか？練習の方は」

「うへ……えつと……その、頑張つてはいるんですけど……」

思案の内に微妙に進んでいた会話。

どりにも修練の具合を聞かれたみたいだが、カナリアの反応からしてどりにも芳しくは無い様子。

「そうですか……私も付き合えれば何かしら助言も出来たでしょうが……『めんなさいね』

「いえつそんな、先生もお忙しいですし。コレぐらい私一人でも大丈夫です。すぐ上達して見せますから先生はお仕事の方を頑張つてくださいですよ」

「ふふつありがとうカナリア」

何と言つか微笑ましいなコレは。

感覚的に大きく感じてしまつティーカップを弄びながらそんな二人のやり取りに和む。

思い返せば近しい連中は尽く騒ぎを起すよつな奴等ばかり。

だからこゝ久しいこの感じは凄く貴重な気がした。

「でもね、ううう… 一人ででよりも他者が居てこそ気が付ける事もあるでしょ？ ジルコニア、身体の方が大丈夫なようでしたらカナリアの手伝いをお願いしたいのですがよろしいでしょうか？」

傍観を決め込んでいた所にいきなりの唐突なお願い。

飛び出しけた軽い動搖を悟られる前に蹴り飛ばしつつ、少々考えてみよといふ…

その必要性の無さにバカラしくなった。

と言つた、考えるまでも無い。

「…はいソレぐらい」ひから願いたいぐらいです

何せ用事も予定もすべからくして何も無い。

潰せる暇があるなら喜んで飛びつくべきだろ？

「えつジルちゃんも？… もしかしてジルちゃんも魔法使いの卵なのですか？ フィーちゃんと一緒に火とかもつかせちゃつたりとかするのですか？」

「火？」

「え… もしかして知りませんでした？ フィーちゃん凄く簡単に出してしまえるのですよ」

「いや、まあソレは知つてたけど…」

フリーの事よりもむしろカナリアの驚き声に反応しての言葉だつたのだが。

(まあこの年の子に炎の質の見極めをして見せると、いつのまでも無茶だしな)

そんな可愛らしい勘違いの対応は微笑ましいと素直に思える。

実際の所フリーが出したと言つ火はただの火ではなかつたのだろう。

フリー…フローリックスにとつては自分自身といつても然程違ひはないであらう神炎を出して見せたのだと思つ。

(あの時も考へなしに出してくれた訳だしな)

思い浮かぶはこの身となつて初めて田を覚ました夜の事。

「でもその後先生にすつごく怒られて、この中庭以外の場所で出しちゃダメって泣きながら約束させられていたんですよ」

身振り手振りその光景がいかに凄かつたものだつたかと教えてくれる力ナリアには悪いがその『すつごく怒つてゐるエスアリア』と言ひのがまるきり想像できない。

どこまでいつてもひたすらに鉄仮面のイメージしか浮かんでこない。

(……いや、ソレはそれで中々か?)

もしかしたらそつちの方が恐ろしいかも？

結局の所曖昧過ぎて印象もつまく固まらない。

(まつそのうち見る事もあるだろ(つ))

と云うかそもそもからして口クな話題でもない。

「まあ怒った先生が怖いのは十分判つたからな」

会話の流れに一区切りを打つ言い様に加え、話の軌道を少し前のソレへと強引に戻す。

「それで俺の事だが魔法の知識だけは十分だぞ。最も…本当に今は知識だけだがな」

軽く笑みを浮かべながら、それでも割かし真剣な調子でテーブルの下の手に意識を集中させてみる。

結果は…まあ予想通り。

「やはり無理でしたか？」

まるで全てを判つた上での様なタイミングでのエスアリアの問いかけ。

「ああ、まつたく汲み取れねえ」

以前なら意識など向ける事無くじく当たり前として在つた感覚。

自身の内なる魔力そのもの。

そして裡より外へと引き出す力の流れ。

しかし今はソレが感じられない。

ただ全くという訳ではない。

それでも依然とは決定的に違う感覚。

分厚い壁の向こうの様な…

見えない。

触れられない。

隔たりが大きい。

そんなイメージ。

予想はしていた。

理由も、理屈も自分の知識で十一分に説明も理解もできている事だから。

「今の俺は…まあ魔法使いとしては終わっちゃってるって事を」

ただ一人置いてかれている感じのカナリアに端的な答えを言ってやるが、余計に首を傾げられた。

「そのよつな言い様では流石に判りませんよ。ね、カナリア」

「あつ いえ、その…… すみません」

「謝る必要はありません。あの言い様で判れと言つ方が無茶な話なのですから」

話に着いて行けない事に萎縮するカナリアを擁護するエスアリア。

なんとなくだが言葉の棘がコツチに突き刺さつてきてる感じで非常に居た堪れない。

「やつですね、良い機会ですし少し講釈をいたしましょう」

「はい、よろしくお願ひします」

まあそんな感じで朝のお茶会は一転して座学の講釈へと移り変わった。

第17話・ヒスマニアの魔法講座その1（前編）

今日はまたとんどり説明します。

第17話・エスアリアの魔法講座その1

「ではカナリア、まず始めに質問ですが魔法使いにとって絶対に必要不可欠な才能とは何か判りますか?」

「えつ…えつとそれは…魔力のコントロールですか?」

少し自信無さげな答え。

その答えも確かに間違つては居ない。

幾千、幾万とも在ると言える数多の魔法体系。

それらの根本は魔力と分類される力の行使であり、操る事なのだから。

しかし今この問い合わせして言えば…

「いいえ、ソレは正解とは言えません。確かにソレも必須に近い技能ですが絶対と言う訳ではありません」

そう、魔力操作を必要としないモノも在る以上正解とはいえないなる。

まあもつともソレは魔法と言つて良いのか議論が分かれそうな例外的なモノだがな。

「正解は魔力を引き出す才能。魔力の無い者には魔法も魔法具も使えませんからね」

「えつ…でもそんな事…」

「そうですね、魔力とはその大きさに違いがあつても誰もが持つもの。そう言いたいのでしょうか？ですがソレは正しい認識ではあります。現に『魔力無し』と言う言葉もありますしね」

「『魔力無し』…ですか？」

どうやらカナリアには初めて聞く言葉らしい。

まあそれも当然か。

なにせ事例が少ない上に興味を持つ者は更に少ない。

魔法を特別視する者たちの中にある種の侮称として使つてている者がいるくらい。

まあエスアリアにとつては単なる知識の一角程度でそれ以上でもそれ以下でも無いであろうが。

「ええ魔力を全く発現出来ぬ者を総じてそう呼んでいます。ところでカナリアは魔力とは一体何なのか調べた事はありますか？」

「えつとその…すみません」

再度の問いかけに俯き気味のカナリア。

内心は期待に応えられていないのかとか、無知を責められているとか、そんな感じかもしれない。

「いえ、良いのですよ。うつ気にせずとも、教える機会もありませんでしたし普通では気にする者も少ない項目でしょうですからね。まあいつか機会があれば調べてみては？　なかなかに奥深く面白い世界ですか

ら」

そんなカナリアの様子に気にする必要は無いとエスアリア。

傍目に凄く微笑ましく映る親子な風景。

ただ傍目から見ているからこそなんとなく判るが…

伝わってないぞとエスアリアにはちょっと言いたいかな。

(…まあフォローは後でも良いか)

エスアリアの眼差しに全く気がつく事無く落ち込みつ放しのカナリアの様子に、それでも話の腰を今あえて口で折る必要も無いだろうと静観を決め込む。

とは言つてもその空氣もさう長くは続かなかつたが…

「今日の所はジルコニアの…『魔力無し』についてですね。では始めに魔力とは一体何なのか、どこから生まれ出る力なのかになりますが…その答えは魂からとなります…」

エスアリアの語り調が説明…否、むしろ講義と称すべきか。

そんな感じの独特的の硬さを感じさせるようになる。

「…………」

そんな空氣をカナリアもまた感じ取ったのか、ビートなく沈んだ感じのうつ向き氣味だった顔を上げ、真つ直ぐな眼差しにての聞く態度へとその身と心を入れ替えさせていた。

「魔力とは何なのか？ その根本的な答えを表すとするなら生命力・魂そのものの持つ力と言う答えが最も正解に近いでしょう。それゆえに生在る全ての者は魔力をその身に宿しておるともれ、例外的存在として生なき生物であるアンデッドが居るべひいでしょうか」

「アンデットも生物…なのですか？」

エスアリアの語りに違和感でも感じたのか、カナリアは微妙な表情にて語られた言葉をそのまま口でなぞるよつに呴いてみていく。

「あなんだ、生物と生命は」の際でははつきりと別物となるんだ。生物とは確固たる意思を持ち己が考えの元行動を起せるものの事を言つんだ。まあアンデッドの中でも極一部のそれこそ最高位に位置するよ

うな高位存在がそこに仰まれる程度だけだ

「ええその通りですジルロニア。そして生命とは魂を宿した命を持つものの総称となります。魂か命のどちらかを亡くし、結果どちらかのみで現世へと干渉し続ける存在がアンデッドと呼ばれるゆえにこちらには該当しません」

そう俺の説明をエスアリアが引き継いで最後まで語りきるが、はたしてカナリアに理解できたか。

「」の議題に関しては今もまだ異を唱えている学者も多く居るほどには確固とした理論でもないのだ。

「とは言え、今はまだそれほど深く考える必要もないでしょう。そういう考え方があるとだけを覚えておくだけで今は十分でしょう」

「まあそうだな。それで話を戻すが魔力が生命力である以上生きている以上その力を持つていらない者などは居ない、例外無くな。それこそ『魔力無し』とか関係なくな」

「えつでも……あれ？」

俺の言葉にカナリアが首を傾げる。

言い回しに引っかかりを感じと言ひ風に。

「そうだ、それだと確かに『魔力無し』と言つのはおかしい、魔力は確かに持っているのだからな」

そしてその感じたであろう引っ掛けたりを正確に言葉として表してやる。

「だから『魔力無し』と言つのは正確な表現ではない。魔力を確かに持っていて、実際それも証明されている。正しく言い表すなら彼らは『魔力を引き出せない者』と表すべきだろうな」

「ええ、そしてその原因の一つが今のジルロニアの症状でもあるの

です」

肯定と共に続けられたエスアリアの言葉に外れかけた視線が再び
「ちりの元に戻つてくる。

目に見えるほどの驚きを見せながら。

「まあそう驚く事もないだらう。俺がソウだつてのは最初から書つ
てた事なんだしよ」

そんなカナリアの反応に苦笑交じりの笑みで応えてやる。

「魔力、生命力を魂から引き出す為にはその器たる命から汲み出さ
ねばならないんだがな、それぞれが持つ属性が違つている場合それが
が上手くいかない事があるんだ」

「命と魂の属性…ですか？」

続ける説明に困惑の表情。

少し話しが急ぎ過ぎたか？

「ええそうです…とは言いましても、そう滅多にある事ではないの
ですけどね。本来であれば魂の受け皿として命と言つ器が作られ、
それに合わせる様にして肉体もまた適応していくと言つ感じで、自
然と属性

は統一されるものですから。ですから普通なら分けて考えたり
はしないものなのです。それはそれで当たり前の筈の事なのです
らね」

付け加えられるエスアリアの言葉を聞いて、せりてカナリアの困惑は深まつていいくか。

まあ当然と言えば当然だね。

「」までの説明、『魔力無し』を完全否定するよくな話だ。

「まつなんにしたって例外は存在すると云ひ」とだな

「普通はそれぞれの属性など意識しないものですからね。それを考え、考查しようとするのは生命の根底を探ろうとする一部の鍊金術師ぐらいのものでしょ」

「まあ そうだな。あつそれで今回の俺の場合は後天的な例の一つだな。まあこんな事が可能だつたなんて思いつきもしなかつたことだが」

そう、あまりに突拍子もない体験をしているのは今の自分は。

本来の形でない肉体と命に魂を入れられた現状。

しかも対極と言つて良いほどに属性のかけ離れいでるであるびんごにだ。

無茶苦茶にも程がある。

こんな状態で属性がそろははずなどあり得ない。

実際欠片も魔力を汲み取れはしなかつたわけだし。

「ジルちゃん…どうなっちゃったんですか？」

「ちょっとした事故みたいなもんだ。まっ死に掛けたところを救われた結果としては安いところじゃねえか」

心配そうに見つめてくるカナリアにそう笑つて見せてやる。

詳しいことは教える訳にはいかないだらうが、心配ない程度には軽く流せて見せてやる必要はあるだらう。

魔法使いを志す者からしてみれば魔力を失うと言つ事情はずいぶんと重い枷に感じられるであらうだから。

だから笑つて見せてやる必要がある。

たいした事じゃない。

気にする必要もない。

と、そんな風に。

「まつ知識だけなら無駄にあるからな、実技は無理でも十分カナリアの先生になつてやれるわ」

「…ハイよろしくおねがいします。ジルちゃん先生」

そんな俺の気持ちを感じ取ってくれたのか、カナリアもまた少しふざけた感じでの答えを返してくれた。

そんな風に気づいてくれられる子だ。

まだある五十のシロツモ共に、JR西日本内すべてに解けたんだから。

まあ向かい合えてはこらんだ。

へたに急ぐ必要なんてない。

のんびりゆくつ、歩み鳴るのそれからでも十分。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4074f/>

魔王と呼ばれていた少女（？）

2010年10月9日12時31分発行